ふじそだち

東京農大畜友会



東京農業大学畜友会

表紙は語る

生きるということは、産声をこの世に宣してから相異る道を歩んで行く。乳児、小児、少年、青年、壮年、老年と生きてゆく軌道にあるのだが、人間誰ひとり同じ考え、行動、思想等はあるといえないだろうし、身が成長するに従い単的にいって人間として成長してゆかねばならない。我々も現今の青年からだだっぴろい世界に何らかの姿で存在あらしめねばならない。

人間として自ら満足し得る方向へ、すべての事物から一つ一つ己の物となるべきものを引き出しつつ己の知識をも導入して果てしない未知の世界に飛び出そうではないか。

生きる過程において、喜び、悲しみ、苦悶、停滞、突進が待ちわびそれぞれの人間に心臓の音を絶えさせないように生を与えているのではないだろうか。青空がのぞいでいる世界で為すべきものを見つけ出し、見つけ出すのみで完結しないで ――――

洗った後も生みたてそのままの卵殻！

完全殺菌により鮮度保持にもすぐれた
効果が立証されました

輸入強力洗卵洗浄剤

エグクリーン
egkleen

汚染卵の洗浄、保存、消毒
飼料箱、鶏舎壁床の洗浄
（乳牛の乳房洗滌、
酪農器具の洗浄）

田村製薬株式会社 化成品部
東京都千代田区神田駿河台３の５（三五ビル） 電（294）0101～3

!!養鶏自動化のパイオニア!!

スターアトラス自動給餌機 ..... チェーンを使って飼を送りますので餌こぼれなく労働力も軽減されます

アトラス・シングル．アトラス・ダブル．アトラス・ジュニアの三種類

人手がいらず断えず新鮮な水を送ります。..... スターアトラス自動給水機

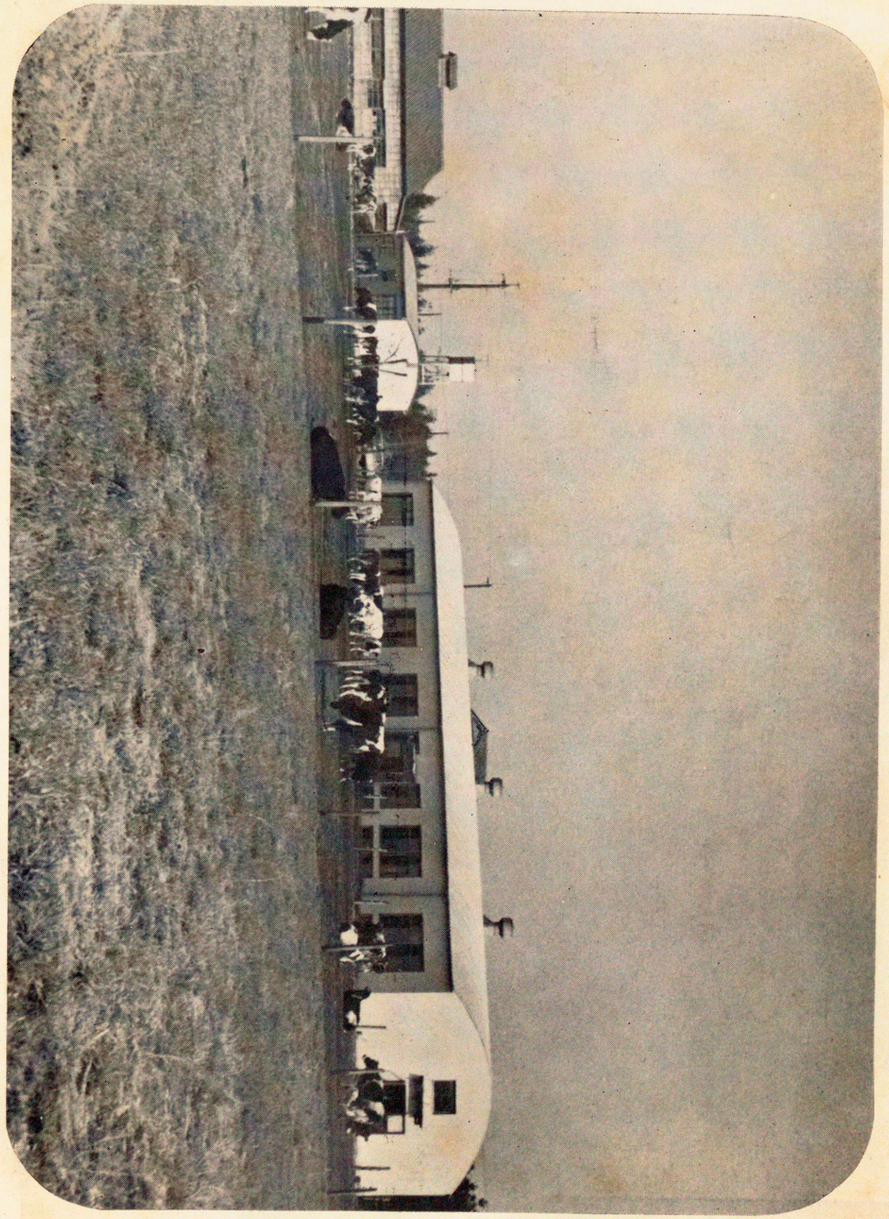
スターアトラス自動除糞機 ..... スイッチ一つで鶏舎はサッパリ

鶏舎に入る事なく集卵できる便利な装置です。..... スターアトラス自動集卵装置

御用命の際は農大OBの 三 井 迄

製 造 発 売 元
富 士 器 材 株 式 会 社
東京都太田区矢口町910 TEL（731）3218・（738）6891

―その他営業品目―
一 般 畜 産 資 材
畜 舎 設 計 施 工



相模原志村牧場

ふじみの―第五号―目次

巻頭言 …… 畜友会委員長 橋本敬次 1
日の丸と農大ペナントをかゝげて …… 畜産学科科長 平林忠 2
夏季実習の感想文を読んで …… 石原太衛門 3

特集 ― 北海道冷害

北海道冷害について …… (原地より) 平野善蔵 6
冷夏に思う …… 北海道北見農業改良普及所 上村寛 8
北海道冷害に思う事 …… 畜産三年 上野紘一 10
北海道冷害実情 …… 畜産二年 関剛 12

随想

下宿住まいで猫を飼う …… 三十九年度卒業生 三浦貞夫 13
僕の畜産経験 …… 三十九年度卒業生 伊藤喜英 14
文明について …… 畜産三年 現田寛 17

短歌 ― ある日ある時 …… 三十九年度卒業生 三浦貞夫 19

特別寄稿

ヨーロッパかけ足旅行 …… 畜産四年 杉本健文 22
バカとは何か …… 造園学科 吾多岐 24
牛枝肉のサシ霜降と価格の関係 …… 板橋功芳 27
汽車 …… 畜産二年 足立正孝 28
部活動をやってみて …… 畜産三年 松尾俊樹 29
夜の断想 …… 畜産二年 高崎市郎 31
何事も体験 …… 助教授 一戸健司 33
旅の断想 …… 畜産三年 羽田蓬月 35
生命 …… 畜産三年 成木青彦 37

愛する詩 彼女からの手紙 …… B・B生 41
自然 自分自身の戦い …… 畜産四年 前川浩平 44
公衆道徳 …… 畜産四年 T・S生 44

研究室便り

畜産製造学研究室 …… 47
家畜飼養学研究室 …… 48
家畜育種学研究室 …… 49
家畜繁殖学研究室 …… 49
獣医学研究室 …… 50
畜産経営学研究室 …… 51

昭和三十九年度優秀卒業論文

A 学長賞・家畜姓娠診断に関する血清学的研究 …… 向山明孝 53
B 科長賞・香辛料の脂肪酸化防止に関する研究 …… 福井通昭 55
家畜に於ける背骨運動の比較解剖学的考察 …… 門山裕子 56
C 三浦賞・家畜の嗅覚について …… 佐藤信哉 57
D 西川賞・鶏の消化に関する研究 …… 詑摩寿美一 59
E 伊藤賞・鶏に於ける二、三の経済形質に関する性染色体および母体効果の遺伝学的研究 …… 椛本順 59
…… 中村昌之 59

昭和三十九年度卒論一覧表 …… 62
東京農業大学畜友会規約 …… 66
畜友会だより …… 69
特別会員住所録 …… 70

鳴海製陶
日本陶器
東洋陶器
特約店
セトモノデパート
日光陶器
経堂店　小田急線経堂駅前農大通り
TEL.(420) 4111

原稿募集

編集部では〝ふじみの〟第六号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとする為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いします。

記

〆切　四十一年一月末日

要項　○論文、随筆、紀行文、主張
四〇〇字詰～十枚以内
○写真カット、は随意
○表紙図案、三色以内

宛名　東京都世田谷区
世田谷四の四六一
東京都農業大学畜産学科内
畜友会
ふじみの編集委員会行

発行日　昭和四十一年四月二十日予定

応募原稿は一切お返し致しません

畜友会〝ふじみの〟編集委員会
TEL(420)二一三一(代)

巻頭言

畜友会委員長　橋本敬次

出来るだけ先の事を考え、複雑な問題を解きつつ、よりよい結果の為に行動に移ることは実に難しく苦しい。しかしそれを回避しようとしたら、会の運営は破れることを覚悟せねばならない。必要なことは会員の一人一人が、自分は明日の農業界を背負って立つのだということを自覚し、指導者の気持になって自分の為、世の為に努力を惜しんではならないという事である。

独自の才能、その歯車が噛みあわさって明日の日本、いや明日の世界を動かしてゆく原動力となるのである。倒れるのは起き上る為であり、敗れる事はよりよく戦う為である。

小さな事でくよくよせず大きな気持、高い理想を持って堂々と、前進しようではないか。

諸君!!

日の丸と農大ペナントをかゝげて

畜産学科長　平林　忠

子供が日の丸を見て古橋の旗といった、と大人が驚き嘆げいたのは十五年前のロスアンゼルスでの出来事であった。子供はなにも知らず、古橋が優勝するたびにかゝげられる日の丸のはたを古橋の旗と思い込んだのであろう。子供の間違いを驚き嘆げく前に、大人が教え導びかねばならぬ筈だ。しかるに此の二十年間、誇りも自信も失って、国旗掲揚すら忘れていたのは大人ではないか。反省すべきことがらである。

東京オリンピックで、国旗と国歌が国民の胸深く自然に滲透した、これは昭和卅九年の最大の収穫といえる。いやもっと大きい、二十年間における最大の収穫といっても過言でない。

東京農業大学は泉山理事を団長とする百八十五名の西欧農業研修団を組織し、ヨーロッパ七ケ国五千五百余キロに亘って、日の丸と農大ペナントをかゝげて走破した。これは農大史上最大の壮挙であった。その上、団員一同が祖国日本の「ヨサ」を体験したことは千金に値する収穫といっても誇張でない。

学生諸君!!　日の丸と農大ペナントを高らかにかゝげ、自信と誇りをもって、昭和四十年を前進しようではないか。

夏季実習の感想文を読んでみて

石原太右ェ門

毎年夏になると、年中行事の一つとして、畜産学科一学年の夏季実習が行はれる。

この実習は、昭和三十七年までは、元千葉県茂原市にあった分校の農場で行はれていたが、昭和三十八年からは、新設の厚木農場で実習されている。この実習の最終日には、学科長の挨拶があって、学生に感想文を書いてもらうことが、恒例となっている。そこで私は、参考のため昨年即ち昭和三十九年に実施された夏季実習の感想文を読んでみて、感じたことを二、三次に述べて見よう。

私が第一に懸念していたことは、団体生活のやり方に対し、学生が強い不平不満を抱いていないだろうかという点であった。申すまでもなく団体生活には、個人の我儘は許されない、勝手きままなふるまいは許されない、一定の規律の元に行われるきびしい生活であって、しかも十二日間の罐詰生活である。この不自由な苦しい団体訓練も、祖国愛に燃えていた戦前に於ては、当然のことのように思われていたが、果して現代の青年にとってはどこまですなおに受入れられるか、また時代に逆行したやり方だと、強く批判されはしないかという点であった。ところが感想文には、特にそういった点は伺われなかった。むしろこの共同生活によって、よい友達が得られた、真の友情愛を感じた、お互に腹を割って、よく話し合い、人の性格や、物の考え方など、社会的な面に於て、いろいろ学び得るところがあったと述べている。このことは、たとえ一部の学生の感想であったとしても、私は喜ばずにはいられない。またこの実習には、どんなことをやらせられるのか、果して自分の力で最後までやり通せるかどうか、非常に不安を抱いてやって来た学生もあったようだが、実際やってみて、どんな辛いことでも、思いきってやればやれるんだという自信を身につけたという者、或はこの実習によって、人間が生きるために最も大切な根性というものを、聊か養うことができたとか、或は体験する機会が得られたという者など、精神的な面に於けるプラスの多いことから、一層農場実習の重要性が認識

されたのである。

現代の青年は意気地がない、気力がない、責任感がない、道徳心がない、自由と我儘をはき違えているといわれている。しかし私はこの感想文を読んでみて、決して悲観するものではない。日本民族の魂は、まだ消え去っていない、教育によって、訓練によって、立派な人間が形成されることを信じたくなった。

根性の養成は、昨年のオリンピック大会に於て示されたように、スポーツや職場を通じて行われるが、要は立派な指導者と、その根性を養成する機会を与えることが、極めて肝要であると信ずる。

次に実習の時期であるが、八月中旬は遠距離の学生にとっては、甚だ迷惑である。このことについても、相当不平があるものと思っていたが、案外少なかった。勿論出来得ることなら、七月上旬とか、八月下旬に行われるのが望ましいことであるが、農場その他の都合上、現在のところ止むを得ない、我慢が願い度い。

尚この実習によって、学生の記憶に残るものは、講義や説明ではない、家畜を対象とした実習、即ち搾乳とか、去勢、屠殺解体のような直接学生が自ら手を下してやるものが、歓迎され会頭にあるように伺われる。これがないと実習をやっても、ほんとうにやったような気持になれないらしい。この為にも、もっと家畜を殖し、教材を豊富にする必要のあることを痛感する。その他技術指導や、生活及び実習面に対し、いろいろ参考となる要望や意見などもあったが、これらは事情の許す限り、期待に副うよう、努力いたしたいものだと思っている。



特集

北海道冷害

1. 北海道冷害について　平野善蔵
2. 冷夏に思う　上村寛
3. 北海道冷害に思う事　上野紘一
4. 北海道冷害実情　関剛

北海道冷害について

平野喜蔵

思うに一九六四年、昭和三十九年度の農業災害は我々過去五十年間に経験した幾度かの災害凶作中最大のものと断定され、生産技術経営方策その他管理にも最新の措置が講ぜられた筈でありますが、自然現象はそれ等の人為を尚微力なものと化せしめたのであります。時将に農業の近代化が提唱され、構造改善の推進が主題となつている矢先、此の天の試練といいますか、寒地農業の確立と謂ふ命題と取組みつゝある農業並びに農業関係者に対し一大警告が与えられたとも解せられます。私等農民は此処に於て深く思いを致し禍を転じて福と為す恒久対策の作定に誤算なきを期さねばならぬと存じます。此処に昨年の凶作に対する気象状態を参考までに申上ます。昨年は一月新春早々稀なる暖かき天候に恵まれ実に凌ぎ易い月であり降雪も五糎位一度降つたのみついに二月に入りましたが、寒とは言え比較的気温暖かく相変らず降雪少なく最近に見られない現象です。然るに三月に入り逆に寒さが甚だしく、春とは言え川の水も遅れて張り、今年の馬耕期は土壌の凍水が相当に深いので遅れるのではないかと配慮して居りましたが、思つたより早く平年同様四月二十日頃より一斉に馬耕にかかり順調なコースで良い天候に恵まれ、実に農作業も進み五月二十日頃より秋作物の蒔付に入り本当に気温暖かく蒔付も予想以上に進行して六月を迎えました。春以来あまりにも天候が良かったので心配して居りました逆現象が突然に変化して、気温は低下して曇雨天が引き続いて各作物の発芽が遅れ、或いは種子の腐敗甚だしく我々農民は唯々天を仰ぎ天候の回復を祈ったのであります。然るに七月に入りましても天候は悪天が引き続いて農作物の生育は全く上伸せず愈々土用入り後の天候に期待をかけて居りましたが、相変らず悪い天候に悩まされ、大小豆の開花も平年より一週間位遅れて花も見せましたが大事な土用に低温で雨ばかり降り、特に小豆の花は咲いても咲いても腐って落ち、

実は一向につかず振返つて見れば大事な土用期間中に晴天日和三日足らずです。それでも天候は悪くても気温が暖かく地温があればこんな状態ではなかったと思いますが、温度が低いのではどうにもなりません。九月に入って遂次天候も回復して遅れた各作物の背丈は普通に伸びましたが時、既に遅く或いは二週間位早かったら見るも無惨な結果にはならなかったと思いました。天は我々農民の願い叶わず十月七日、八日引き続いて零下五度以上の霜害をこうむり之にて農民の努力の結果は水泡となつた次第です。それでも折角努力して作った大小豆の刈取をして平年より一週間位遅れて脱穀を十一月五日頃までに完全に収穫を終りました、先収穫量は平年反収の三分ノ一位獲らせていただきました。私の経営畑六町五反位の耕作です。今年こそは長期予報に観点をおき万全対策をたて良く研究して二度と昨年の様な打撃を受けぬように完全な農業経営を確立して行く覚悟で頑張るつもりです。昨年の農業災害に対して各方面から種々御支援を賜わり心から厚く感謝致して居ります。共に各方面の皆々様の御多幸を、遙か北海極地の彼方より御祈り申し上げます。



冷夏に思う

上村　寛

今年はめずらしいことに久しく忘れかけていた大雪が降った。これも昨年で二年続いた北海道の冷害が今年も継続することの前触れの様な薄気味のわるい気持ちもする。

小生が小学校に通っていた頃は大雪のためによく学校が休みになった。思いがけない休日は何をすると云うこともないが楽しい思い出として記憶に残っている。しかし近頃の降雪を見るとその頃にくらべて非常に少なくなって来ている様に思う。神聖なクリスマスの夜もホコリッポイことも珍らしくない。正月でさえも北国らしからぬ汚ない元日を迎えることさえある。こんなことから今年の大雪は子供の頃に遊んだ楽しいことなどを思い出させてくれるものゝ、昨年に続いて四十年も異常天候による冷夏にならなければよいものと祈る。

それにしても昨年はよく陰うつな雨の日が続いた。例年網走の雨量は年間一〇〇〇㎜を越えることがなく、我国でも一番降水量の少ない所とされていたが、網走気象台のまとめた昨年一年の記録によると、六、七、八の三カ月間の降水量は四〇五㎜もあって平年の一・六倍にもなり、網走気象台開設以来のレコードになったとのことである。又、日照時間の三カ月合計でも四四一時間で平年の七五％にとゞまり、三日の内に二日は曇雨天の日が続いたことになる。

しかし、今年高値の相場で騒がれている小豆などの豆類は冷害に弱い作物の代表の様に云われながらも葉づきどは非常によく、耐冷性品種の改良の実績を改めて認識させられた。だがこれも九月二八日の凍害とも云える強霜によって冷害を決定づけられてしまった。水稲の反収は〇～二俵、豆類〇～一・五俵等わずかにとれた作物も品質が悪くキナくさい臭がした。

市街から二〇キロほど離れた所に市営牧場があって夏の間農家の育成牛をあずかっているのだが、今年は天候不順のために山の芋も不作であったと見えて山のオヤジ（熊）の出没が頻繁であった様だ。北海道のヤツは、正確にはヒグマと云うそうでトウモロコシの毛の様な茶褐色をして立ち上ると大きいのは二米以上もある。古い図鑑を見ると「巧ニ鮭ヲ釣リ上ゲテ貧食ス。……」と書いてあるが、今は川口の孵化場で鮭が止ってしまうのでそんな訳けには行かないだろう。

北海道でも「酪農は冷害のない農業である。」と云われていたのだが昨年を見ると酪農家の被害も大きく、冬期間の飼料不足に頭を悩まして乳牛を手離す酪農家もある様に聞いている。

低温、多雨、日照不足と気象の三悪が出揃った様な昨年の夏ではあったが、他の作物は別として飼料作物の生育経過を振返って見ると人災の要素もかなり多い様にも思う。

つまり四月から五月にかけては気温が高く、適度の降水によって牧草の生育は例年より早く、デントコーンや家畜ビートの発芽もよかった。六月以降は不順な天候が続いた為めにデントコーンの生育は遅延したが、牧草はわずかな気温と日照をすべて吸収、消化して順調に生育した。酪農の被害のトップは乾牧草の減収と品質が悪いこと、デントコーンの未熟と減収と云える。これも牧草の追肥と適期刈りとりを行って例年以上の反収を上げ、更にスイス式の針金乾燥法により天候不順の中でも良質の乾牧草を十分に作った酪農家もある。

冷害に弱く、多肥性、労力もかゝるデントコーンはやがて牧草にかわって行くだろうし、牧草の作付が多くなると機械化もしやすく、多頭化の実現も着実に進みそうに思う。いずれにしても早い機会に昨年の様な「酪農にも冷害あり」の前例をなくする様に努力したいものである。

（網走支庁北見農業改良普及所）



北海道冷害に思う事

畜産三年　上野紘一

二年次の夏期実習で、僕は、同僚ら六人と北海道へ行った。その実習中のある日、十勝地方の或通信教育学校の生徒達と話し合いをした。その学校のある、地方の農家は、「豆」一本槍の農家で彼らも学校を卒業したら家の仕事を継ぐんだと、はりきっていた。僕達は、その彼らのファイトに少なからず感心したものだった。

しかしそのころから、冷害の第一歩が始まっていたのだ。僕らが北海道に着いたのが、六月上旬、そのころまだストーブをたいていた。北海道生まれの僕でさえ、六月になってもストーブをたいていたという経験は、あまりなかった。そしてこの頃から冷害を心配する声が起っていたのである。しかし、多数の人たちは、以前の豊作で安心し切っていて、冷害などはあまり考えていなかったようでした。がしかし、今年の夏はとうとう寒いまゝで終ってしまい、その後に寒い秋が続き、冷害が現実の問題となってしまったのだ。その惨状は、皆んなが知っての通りである。

そこで僕は、十勝地方の豆一本槍の農家について思い出した。今度の冷害で、もちろん、彼等も手痛い被害を受けたであろう。彼らだけではない。農作物一本槍で、今までやつて来た人たちは、ことごとく被害を受けているのだ。そして、彼らは、生活するためのただ一本の道を閉ざされ、借金が重なり、その挙句のはては、一家心中という、みじめな結末で終ってしまっているのだ。

このような、犠牲者を今後一人でもなくするための道は、いくつかあるだろう。その中で、最も効果的な物が酪農である。

今度の冷害でも、酪農をしていた農家は、比較的、少ない被害を受けただけで済んでいるのだ。農作物と、酪農の二本立ての農業をやって行けば、たとえ一方が、全滅の被害を受けたとしても、もう一方が、なんとか、その被害を最少限度にまで食い止めてくれる。決して一家

心中などという哀れな末路に終ってしまうことはないだろう。

だが、ここで一つ問題がある。

酪農をするには、まず牛がいる。その牛を買うためには、どうしても、まとまった金がいる。借金に借金を重ねた冷害農家がこの上また借金をして牛を買い入れるのは、不可能に近い。さて酪農をやりたいが牛は買えない。どうしようということになる。

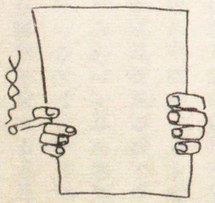
そこで共同経営ということが頭に浮んでくる。これだと一つのまとまった土地と、まとまった人数がそろえば、出来そうな気がする。現に北海道で、酪農協同経営を行って、かなりの成績をあげている所はいくつもある。

だが、集まった人の意見が合わずに、結局解散してしまったグループもいくつかある。その原因の大きなものは、経営するために、必要な資金の分担だとか、経営によってあがった利益の分配だとか、要するに金に関係した事であるということだ。

金が第一の今の世の中にもっともな話しではあるが、それだけに共同経営のこれからに、大きな問題をなげかけているのだ。

冷害対策として考えられるのは、共同経営だけではないかもしれない。もっと良い対策を考え、問題多い北海道酪農をいかにして発展させて行くか、ということは、我々畜産学科に学ぶ学生に与えられた一つの課題であろう。

以上愚筆ではありますが北海道冷害について道産子として感じたことを、思いあたるままに書き連ねてみました。



北海道冷害実情

畜産二年　関　剛

「災害は忘れた頃にやってくる」ということわざがある様に、今回の北海道冷害がやってきた。原因は自然的だけではなく農政等の悪循環から発生したものであるかも知れない。こんな点から人災と言われる故である。今年の北海道の気温は夏場まではよく六月大雨、七、八月の異常低温、九月の大霜、十月の雪と例年にない異変だった。特に低温にプラス日照時間も少ない為、作柄は三週間程度の遅れをみせ、その上に霜、雪により、全ては決まった。社会的には、全ての悪循環が現われた様な気もする。特に被害状況からもわかるように、五七三億円の内、一割が水稲で二割が豆類である。つまりこれらの害作物は本土からの移入農産物である。それらは当然、高緯度に移るほど危険を含む。いわば北海道では、危険作物である。だから適地適作の規定には除外されるべきものである。こんな点から、被害が大きかったものも不思議ではない。

それでは本来の北海道農業はどうあるべきか今回の冷害だけに限って述べるならば、被害作物は、地上部のものに集中したこと、脱性種に被害大なることともちろん、全農家が被害を受けていないことなど、考慮に入れ、道内の営農計画を検討されたい、又各農家に対しては今回を機に、もう一度我が営農の反省してみる良いきかいだと思う。作付計画や安全作物導入による危険分散等の経営構造の改善により自然や社会の制約は多いが、経営内部で今さしあたって経営規模に合った中で最大限の収益を継続的に得ることができる安全性の高い合理的経営を考える農民であつて欲しい。我々は今回の冷害を機に一転、北海道農業への関心と共に、日本の農業に対する関心が高まる様要望したい。

随想

下宿住まいで猫を飼う

三浦貞夫

四帖半の狭い部屋ではあるが、トラと私が住むには別に窮屈を感じない。

私がここに下宿したのはおよそ一年半程まえのことである。それまで二年間はにぎやかな寮生活を送ってきた。それに比べて一人住まいの下宿生活とは実に淋しいものである。だから下宿当初はよく寮へ遊びに行ったものだ、寮には三〇の部屋があり、毎日一部屋づつ訪れても同じ部屋には一ケ月に一度しか顔を出さないことになる。してみれば大して迷惑もかけまえと思ったからである。しかし、一年もたてば大概行きずらくなるものらしい。私はいつの間にか、自分の部屋でボンヤリ時を過ごすようになっていた。そんなある日、何を間違えたか一匹の猫がヒョッコリ私の部屋に現れた。元来、猫は犬ほどに好きではなかったが、退屈しのぎに煮干しなど買っては食わせていた。最初のころは時たま現われ餌を喰ってはどこかへ行ってしまったものだが、そんなことを続けている内、危害をくわえない、善良な主人たることを見込まれたらしい、私が学校から帰えるころにはいつも、たたみ忘れた布団の上にコロリと丸くなって寝ているようになった。そして、私が部屋に入って行くや否や実になつかしそうな声をたて、チョコチョコと走り寄ってくるのである。猫は餌欲しさに走り寄って来るのであろうが、そんな時の私もバカなもので、さも自分の帰えりをひたすらに待っていたかの如き錯覚に落し入れられるのである。猫には通じようはずのない言葉など発して……。

私はその猫をトラと呼んでいる。トラは全くの寒がりやで、夜など寝込んでしまった私の枕元からソーッと遠慮深げに布団の中に入り込む、それを真夜中にやられるのは、あまり気持のよいものではない、何かが、鼻づらをかすめて行く様な気がして肝をつぶす時がある。それ故このごろは初めから抱いて寝ることにしている。

トラの用便は大抵夜行われる、その為、部屋の窓は昼夜を問わず二十センチ程あけはなしておくのだが、近頃は冷え込みが激しいので夜は閉めることにした。それまでは猫の用便など見たことがなかったのだが、そんなことで、最近は毎朝目にするようになった。用便の際、犬

などでは大抵前肢で穴をあけ、用を達した後は後肢で無造作に、しかも形式的に土をかぶせるものだが、猫は前肢でかなり深い穴を掘り、用便後も前肢二本を用いて完全にその形跡がなくなるまで、丁重に土をかぶせる、その時の面持は実に真剣そのものである。私はそんなトラの仕種を遠くで見ながら一人で苦笑し、また猫は犬よりも野性に近いのではないかなどとも考えたりする。時々用便中にどなってやると、犬などでは、白い目でジロリとにらむのが普通だが、猫は「イヤナヤツ、クソデモクラエ!!」と云った風にしてにげて行くのである。

犬は人に従え、猫は人を従えるなどと云うが、全くその通りで、ある時など大屋さんから、立派な魚を引きずり込み、さんざんな目にあったことがある。そんなことで、私も一時はトラの面倒をみきれなくなり下宿より二キロ程離れた処に捨てたことがある、しかしものの三時間もたたない内に、トラはゆうゆうと我が家へ舞い戻って来たのである、私は、何事もなかったように布団の上でゴロゴロ仕始めるトラを見て、欺く事をしらない一匹の生物に、人間はこうも弱いものかとつくづく考えさせられたものである。

それ以来、トラの為には近くの定食屋から残飯を戴くことにしている。これも初めの頃は一日置きでよかったが、最近は近所のノラ猫達までが餌を食べに来るので、毎日戴くことにしている。それが残飯であろうと只で戴くと云う事は実に気のひけるもので、私も一日一食はそこの定食屋で食べることにしている。

トラは今夜も、この原稿を書くコタツの上でゴロゴロ鼻をならしている。

三九、十二、二十

僕の畜産経験

昭和三九年度卒業生
伊藤喜英

小学校入学頃から現在までの記憶をたどって、畜産学科に入学するまでのことを記したいと思います。

元来、私は生き物が好きで小さい頃から、動物を相手に遊びました。そして家畜と言えるものを飼いはじめたのは昭和二〇～二一年頃、五羽ほどの鶏がいて、この時期は卵は病人以外にあまり食べられなかったのですが、おじいさんと家中、誰もいない間にこっそり飲むのですが、その味は陰でのためか大変美味しかったことからはじまる。これと同時に家兎が近くの人が飼うので自分もやりはじめたが、野犬やのら猫のお世話になることが多かったがそれに変り山羊にした。ちょうど昭和二五年で動物性蛋白源の少い当時としては、栄養的にも貴重なものとして、この体を作るのに役立ったことだろうと今、考えるのである。多い時は三頭もいて青草を刈りに行くのも春夏はいいものの冬は苦労した。常緑樹の葉を多く与えたが有毒のものがあり、死にそうになったこともある。そしてこの状態が中学一年生まで続いたが、鶏は一〇羽に増えていた。そして昭和三〇年の春には今までの和牛が、耕運機の普及と同時に不必要になったので、伯父の家に約二〇頭の乳牛がいたので、そのうちの一頭を安く買い、私が中心となり一種の酪農……？らしきものをはじめたわけだ。しかしこれは自家用が主で、飼料代が残る程度だった。しかし、この頃が今まで生きた中では一番思い出が多い。それは乳牛が来た日、父も母も山羊のように両手が共にでる新式？搾乳法で、僕がはじめると正常方法でやることができ、伯父も安心して帰った。そして、次の朝から六時起床、飼を与え、搾乳し、冷却までやり、夕方もこれを繰り返し、二斗罐に入れて運搬する。いつも学校から帰ると青草刈りが待っていて、帰ってすぐ勉強することもありませんでした。でもこの疲れも夕食時にでる牛乳を腹一杯飲むことで忘れ、また飯にかけて、少々のしょうゆを入れて食べる味は、忘れられない記憶です。みなさん一度試してはいかが？それから勉強？？らしきものをはじめるのです。中間試験とか期末試験だからといって仕事を休んだことはないのに成績が下がることがなく、逆に上昇し、学年で一、二、三番を左右する一人になってたのは不思議です。でもこの頃は、やる時には何もかも忘れて、そのことに集中していたのではないかと考えるのです。成績以上に上昇したのが身長で、まア、時期的にも伸びる年頃だったのでしょうが一年間に一九㎝も太陽に近ずいていたのは乳汁も一つの因子として存在したのではないでしょうか。ところがこの乳牛ともわかれなくてはならない日が来たのです。というのも母の病気で昼間の管理者がいなくなったのです。一ヶ月ほどは頑張り通したのですが、ついに親の意見に負けたのです。それは中学三年の春で進学すべきための用意の方が急務だとのことです。そこで比較的時間の節約できる鶏を増羽、三〇羽にして、普及しつつあるケージを買入、毎日、産卵記録を自己流ではじめた。飼料は自家配合で、毎日学校の帰りに魚屋で「あら」をいただき、これを煮て与えるのですが塩分が不足してはと塩を加え、ビタミンが不足してるのではないかとニンジンを細く切り与えたのを覚えている。このためか、糸

統がよかったのかはわかりませんが八割以上産卵していました。すでに点灯もどこで知ったかわかりませんが実施していました。高校に入学すると同時に、飼育者は母に変った。また羊も買い入れました。次の年の春、生れた仔にすこぶる長い尾があったのに驚いた。尾を切る時の小羊の鳴声は痛そうだったな。高校入学と同時に生物部に入り、トンボと蛾類を集めはじめたが日曜になると、あちらこちらの山へ出かけて採集したものです。部室では何かの実験らしきまねごとをやっていたようで、先日、母校へ行き、Biopath という部誌をみたら、色々の実験をやったことが記載されていたが、今はそんな実験もやったっけなアとふり返るくらいです。牛がいなくなると同時に成績は下方に向いつつあった。そして自分で種々の病気を考案して体に貯臓した、神経痛、はれもの…等、最後の病気が虫垂炎で高校二年に手術したがその標本は今でも大切に保存しています。虫垂が長かったせいか入院期間も長期で、医者の失敗らしく、抜糸の時、切った部分がザクロのように口をあき、中から血液の半凝固のがドロドロ、毎日、腹帯を血液色に染色した。お蔭で全快まで二ケ月以上かかり、病院から通学もしましたが、学校では先生の眠り歌を聞き、コックリ、コックリしたらしい。そんなことをしているうちに大学入試がはじまり、農大を受験することにした。ここでも、自分は畜産、親は農学と対立、また自信のない僕が敗れ、農学と短農を受験し、発表の日の自分の番号をみるまでの心臓はドキドキとする胸をおさえて待つ。よかった!あった!!と思った自分だが、いざ入学してみると畜産にはいりたいという不満があり、一年生の六月頃から転科を志す。大学では転科の可否でもめたようだが認められて、願書を出す。その時、畜産学科のみが英語の試験をして、自分はできなかった。どこからともなく、一人落ちたということをきき、ヒヤッとしながら見に行ったが加っていない。この転科は入学できた以上に嬉しかった。自分では念願がかなって勉強するかと思ったがやっぱりやらなかったと反省する。

私の人生の終点を察することはできないので、何も言えないかも知れないが、現時点では畜産を選んだことがまちがっていなかったと言える。そして就職もある先生の御骨折りで、畜産の部門で生活できることは、私にとって、一つの幸福ではないだろうか?二二年間の生命で畜産をのべることはできないが、学問も大切だと思う。しかし実際にやってみることもそれに等しいぐらい大切だと私は思う。私自身何も知りませんのでこれは小さい顔でいいます。これからは動物の気持が十分理解できるような目を養うよう努力していきたいと考えています。

文明について

畜産三年　現田　寛

去年、アメリカの作家ソーローの「森の生活」を読んだ。その時は別段、何という事なしに読み終えたが、最近になって彼の考え、生き方が理解出来、彼に共鳴する様になった。彼は一八四五～一八四七年の間に、コンコードの町から一里ばかり離れたウォールデンの池畔の森の中で、唯一人最低の自給自足の生活を送った。この時の生活経験をこくめいに綴ったのが、「森の生活」である。

彼はこの二年間の間に文明社会から離れ、人生を一隅に追いつめて、それを最低の線まで引きおろし、人生とは生きるに値する物であるかを追求しようとした。文明社会のもとで、情勢的に物を考える事を拒み、人生に真正面から挑み、その奥にある物を深く探求しようとした。彼は又自然主義者だった。自然に親しみ、こよなく自然を愛した。その点では程度の差こそあれ自分も同じだ。だが併し文明と全く解離し、自分を振り返り瞑想し、かつ自然に溶け込みながら、唯一人の生活が出来るだろうか。どうも少し難しい、いやほとんど難しい様だ。

以前にはその様な事が出来たら、素晴らしいだろうなあと思った物だが、今では素晴らしいだろうと思う感情以外に、文明を全く離れて生活する事に対する一種の不安、あるいは毎日の生活が単調に落ち入らない様に、又は単調に落ち入った場合に、それをどの様に解消していくかという様な疑問が浮かんでくる。(あるいはこの様な考えは全く根拠がなく、一日一日を生きていく事で精一杯であるかもしれない)世の中の刺激という物に、ある程度慢性になってしまっている。

文明社会においては、人との交際という事が大事になってくるが、自分は交際という事が好きだ。唯それが行動に直接表われない場合がおうおうにしてある。又むしょうに人と話したくなる時がある。それが自分の愛する人、尊敬する人ならなお一層。又その反面、一人孤独に自分の中に閉じ込もっていたい時もある。誰にも人間にはこの様な面がある物だ。

しかし自分にはこの感情が特に強く表われる様に思える。人を瞬間的に強く嫌悪し、軽蔑する事もある。実に恥ずかしい事だ。だが真に人生を愛する物なら誰でも、一度

は自分を一人静かに振り返って深く追求するという事が必要である様に思える。ふと考えて見るに、今さらながらいかに文明が我々に影響を及ぼしているかに驚く。この発展が将来どこまで行くものか、想像も及ばない。そして確かに我々の生活は、それによって楽になつて来ている。しかしその反面、文明はその弊害をも共に、もたらした事を忘れてはならない。チャップリンの映画の「モダンタイムス」の様に機械に支配されないとも限らない。もちろん現在では機械を操作するのは人間である。又オートメーションによって失業者も多くなって来ている。あるいはだんだんと開拓によって自然という物がそこなわれて行っている。そして科学の悪用によって人類の生命が危険にさらされないと誰が断言できよう。

ソーローは又この点に関して、文明があまりに発展し過ぎる事を恐れて、我々に警告を与えている。人類は文明がどんどん進むにつれて出てくる弊害をいかに解決していくか、難かしい問題だと思う。

ここに解決策を一つ二つでも述べたい所だが、自分にはこの〃文明〃という言葉があまりにも大きく、広い意味を持ち、前に立ちはだかってそれ以上進む事が出来ない。解決策などは浮かびそうもない。It's beyond me. だ。

併しこの問題は、難かしいといつまでもほおって置かれる問題ではない。今や現実の問題となっているのだ。



短歌

ある日　ある時

昭和三九年度卒　三浦貞夫

父死す日いたく目につくネオンあり今宵また見る観劇の後

父のかげやわらに消える枕辺に静かに伝う時をうつ音

学校をやめて会社へ来いと云う大先輩の言葉かなしも

酔いしれて帰えりし寮の一部の明りわびしく我れを待つもの

さけがたき人と時との境にてなす業もなく酒をあおれる

天の川見よと教えし我が友の指す指先に星の流れて

前に那須右に丘陸光る音の左に谷間トラピストあり

孤独なる人と云いしがヘボ易者孤独にあらず今宵楽しや

澄む青の村のはずれの陽のたまり小さきアリの暮れの働き

焼きものを売る老人の音を枯らし秋に吹く風狭き路地行く

過去の事君話す事恋の事我れ話すべく恋を持たねど

この上の幸せ求む術もなし握手の後に別れを告げむ

青白き光りに窓の隅近く小しく出ずる月に喰い入る

白らじらと明けゆく窓の近じかにすずめの鳴くをしばし聴き入る

年下の我れなりしかば君の手をとる術もなし置きどころなし

古里の香り盛り来る一文を嚙み締めんとて布団に入りぬ

酒の場で東大生と名のる人にくやしみに似てあこがれを知る

憎しみと恋しさ兼ねるかの君と犬の遠吠え聴きつつ別れる

ともがらと共に向えて杯交わす時はからずも今宵かぎりか

学問の堅く冷き場をのがれ作りし歌のまずさまたなし

＝特別寄稿＝

ヨーロッパかけ足旅行

畜産四年　杉本健之

「酪農の国オランダ」

一ケ月のかけ足旅行では専門を深く見てくる事が出来ないが、せっかくヨーロッパまで行くからには何か得てやろうと、出発前にヨーロッパ各国の農業事情など下調べしたのであるが、百聞は一見にしかず、アムステルダムの空港に飛行機が着陸すると同時に滑走路のすぐ脇まで乾草の積み上げてあるのを見て狭い土地一ぱいに利用するオランダの行き方をこの目で見、さすが酪農国であると感心してしまった。最初から何もかもがめずらしいのは当然であるが、アムステルダムからヘーグへ向う途中も道路の両側に遠々と続く放牧地はオランダ国内の耕作地の五五％を占めている牧畜用地をそのまま物語っているようである。現在オランダには牛が三二〇万頭おり農業生産高の六八％が畜産品であると云う事はいかにオランダが畜産に力を入れているかがうかがわれるであろう。又この陰にはオランダ家畜協会の指導の下に牧畜の改善が強力に進められている事を聞き、なるほどと思う。一頭当り年間四トンを越える乳量、又バター用油脂含有率が四・〇三％と年々上昇しているのも、牛乳一Kg当り約八円の特別税を酪農家より徴収し、これらの数年間の記録に当てる強い農業政策があるからと思われる。我々が訪問したワゲニンゲンにあるワゲニンゲン農科大学はオランダでは高いと言われる丘陵地にあり下にはライン川の静かな流れと広々とした牧草地、学園都市として鉄道も入れぬ心遣い、このような環境の中で年間九〇〇〇万ギルダ（約九〇億）が国家より割り当てられるそうで現在研究室が一〇〇幾つあり我々はその内、動物学研究室に案内された。さすがに設備が良く講義室から初まり実験室までが何か大学の研究室とは思われないようである。実際に行なっていた研究としては、ガス代謝、家畜の飼料に対する疲労度の研究、牧草の養分に対する乳量の研究など色々あるがこれがすべて大動物で行なわれている所など日本の大学ではなかなか出来ない、研究自体それほど高度なものではなく、驚いた事にその研究室の教授が我々のプロフェッサーである海塩教授の本など読

み色々学んでいるそうである。

オランダに滞在中、アイセル湖の干拓工事、あるいはチューリップ農場と各地を見て廻ったが途中遠々と続く放牧場点々とある酪農家、所が後で気付いたのだが酪農家にはサイロが見あたらないのである。あれだけの牛が冬をこすのに何を食べているのかと疑問に思った。日本ではサイロを見て初めて酪農家だなと感ずるのが普通である、しかしながらその疑問もすぐ解けた、サイロが無くとも農家の脇には乾草小屋があり十一月下旬まで放牧しておく国柄だけあって、乾草の他にライ麦、ビートなどで冬をこさせるのであろう。又途中工場地帯のすぐ脇まで牛が放牧されているのを見て非常に印象に残った。

「フランス」

農民と密接な農業政策

フランスの農業政策は日本の農業基本法のお手本になった事などで我々も大いに興味深い。しかしながら時間の関係で畜産関係はそれほど見る事が出来なかった。我々の訪問したのはセントル・ナショナル・レザーチャス国立中央農業試験場でパリの効外、市内より約一時間で静かな広々とした研究には最適地だと思われた。十三年前に創立、一九五三年には農業部門が投合され現在では動物生理、飼養、遺伝、繁殖、製造の五部門に分かれて研究が行なわれており、研究題目は豚の人工受精（これはロシヤ等に輸出されている）アルファルファの刈り取り、時期別給与試験、アルファルファの火力乾燥消化率の問題、牛の過剰排卵、その他でそれほど珍らしい研究は無かったが、農学栄えて農業亡びるという諺があるが、ここではこの点農民とは密接な関係にあるようである。

「デンマーク」

歴史の古い組合組織

アムステルダムより一時間半、眼下に北海を望み機がコペンハーゲンの上空に達するとオランダと左程変らぬ運河により区切られた畑や牧草地、ここからも世界第一を誇る農業国が伺がわれる。我々は期待に胸をはずませコペンハーゲンに降りた。コペンハーゲンでの研修は農業博物館、農業試験場、農業大学、一般農家であったが幸いにも我々は三五年度畜産学科を卒業されデンマークに三年間おられた笹川氏に会う事が出来たのである。笹川氏の案内により畜産の学生は二台の車に便乗、農家を廻る事になった。今まで自由研修が無かっただけに延々した感じをうけた。最初に訪ずれた農家は市内より五〇

Km、市内より一〇Kmも行けばもう一面畑でなだらかな丘陵地に時々牛の姿も見られる。

点々と見られる農家は、ほとんどがコの字形で、この建方はデンマークでは中農と言われ、六〇～四〇ヘクタールの土地を所有しているそうである。大農は六〇ヘクタール以上、小農は四〇ヘクタール以下で、小農に於いてはほとんど家畜を飼わず、園芸主体で、中農になると家畜主体になる。しかしデンマークに於いては酪農、養豚、養鶏のような専業農家があまり無く、牛と豚の兼業農家がほとんどである。我々の行った農家でも牛六〇頭内搾乳牛三〇頭、豚二〇〇頭を飼育していた。この農家にいた牛はデンマーク赤毛と云われ、耳と角はジャージに似ており体形はホルスタインよりも大きいそうで、驚いた事に乳量が一八K年間五〇〇〇K、脂肪四・五%でこの牛が現在デンマークで一五〇万を数える乳牛の六〇%を占めているそうである。五月から一一月までの夜間放牧で搾乳時だけ牛舎に入れる。雄牛は二～三年肥育して市場に出す。又乳は全べて組合で処理され、畜産品の五〇%がイギリスに輸出され、これも組合がその信用の基に行なっている。組合組織自体も一〇〇年の歴史があり、農民一人一人の力が強いと共に組合と農民の間に中間業者がいないため農民の手に入る金は多く安定した農業が行なわれる訳である。又デンマークの基準産物となっている流線形のベーコン用豚（デンマークランドレス）は七〇〇万を数え、これはデンマーク原産種とランドレス、大ヨークシャーの集中的な交配により生れたデンマーク農民の宝である。飼料はビート、ルタバカ、ホエー、脱脂乳などで油の乗る前九〇Kgぐらいで市場に出すそうである、枝肉の市場は一週間に一度で組合と大農、中農の三者がきめるが、小豚の買売だけは業者の手で行なっているそうである。防疫衛生の面ではピールスによる伝染病が無くそれほど力を入れていない。恵まれているのである。我々もまだまだ聞きたい事、見たい事が山ほどあったが残念ながら時間が無い、ただ華やかに見えるデンマーク農業もアメリカ的な華やかしい土では無いように思われた。

＝特別寄稿＝

バカとは何か

造園学科　吾多　岐

バカとは何かと聞かれても、バカな俺に解る訳がねえ。バカな俺がバカとは何かを答えるとしたら、どんなバカな事に成るか、なんて全くバカバカしいお話しだね。けれども、バカと鋏みは使いようで、バカはバカなりの方法で考えるもんだ。貴方がもしバカなら、バカに付ける薬りは無いんだから、バカな書き物を読むのは止めときな。バカを見るのは、貴方だよ。バカは自分で考えるのが嫌いだから、バカでかい広辞林からちょっと盗み書きをしよう。

バカ《馬鹿：莫迦》これはあて字だよ。《梵語のBathまたはBhaelaka、無知の意と云う。もと僧の隠語、秦の趙高が鹿をさして馬とした故事から出たとするのはこじつけである。》なるほどね。初めにあて字とは、バカとは騙す事なんだな。それから隠語だね。隠語はバカに話しても通じない事だから、バカはやはり煙に撒く事かいな。なんだか心細く成って来たね。煙に撒かれたのも解らないで、無知な奴が知ったかぶりをして話すとこじつけに成るんだな。

それから先は、㈠おろかなこと、あほう、たわけ：か。愚かな奴は手が付けられないで、あほう踊りやバカさわぎ、それで親仁がたわけと云うのか。これはバカに面白いじゃねえか。バカとは面白い事かいな。それじゃバカな奴は面白いはずだ。面白い事は止められねえ。それでバカに付ける薬りがねえんだな。アハハハ、イヒヒヒ、ウフフフ、エヘヘヘ、オホホホ、これが本当のバカ笑い。バカが書く事には罪がねえ。おや、まだ次があるぞ、

㈡つまらないこと、無益なこと。なんでえ、バカとは面白い事じゃねえのか。バカバカしい。バカにするのもいゝかげんだ。やっぱり煙に撒く事なんかな。バカに心細くなって来やがったな。バカ丁寧にこんなもの読んで、貴方も相当のバカ正直だね。おっと、バカ力なんかで撲るなよ。こんなバカ面撲っても、つまらねえだろ、つまらねえ事するなんて、やっぱり貴方はバカなのね。無益な考えさらりとすてゝ、バカ律義にこのあと付き合えよ。バカは果報と云うじゃねえか。

おつぎは、㈢常の度を失うこと。無法なこと、ノミが富士登山すりゃバカに遠いが、奈良の大仏立って歩きゃ東京なんてバカに近い。デブなばあさん、おぶればバカに疲れる。可愛いあの子を車に乗せりゃ勇気百倍イセイがついてバカに元気が出るもんだ。それでイセイと云うんだな。オットットッ神風運転あの世行き。バカは死なきゃ直らねえ。鼻の下伸ばして喜こんで、常の度を失うなんてオマエはバカの見本だよ。どこかの国のどこかの大学は常の度を失っての増員ばやり。それで解った。大学とはバカをつくる所だな。バカを作る所で育った奴

はバカなのがあたりまえ。大学生とはバカの見本だな。手がバカになり、足がバカに成る。水道の栓もバカになる。これは機能が異常なんだな。どこかの国の大臣がやる事は、国内混乱、経済攪乱。それでわかった。そうなんだ、バカの見本は大学生で、バカな事したけりゃ大臣の似をすりゃいい。バカに広いとか、バカに狭いとか、バカに大きいとか、バカに小さいとか云う奴は、自分の知っているのが正常だと思っているからなんだな。これは心で決めた観念論。自分の知識が間違えていると思えば、バカなことなんて無いんだな。自分が正常だと思っている奴がバカな奴なんだな。それで大学生はバカの見本なんだな。大学はバカを作る所なのだな。あいつは俺よりバカだなんて云う奴は、自分が正常だなんて思っている奴なんだ。ところで、バカとは騙すことだから、自分が正常だと思っている奴は人を騙す奴なんだな。正常とは騙して煙に撒く事なんだな。煙に撒く事とは、いつでも完全に正常って云う事は無い事なんだな。それで解った。俺はバカじゃないって奴がバカな奴なんだな。俺はバカだって云う奴が一番バカから遠い奴なんだな。それでわかった。俺はバカじゃなくて正常だって云うのがバカの一つ覚えの事なんだ。バカとは煙に撒く事で、極端に面白くて、極端につまらなくて、常の度を失うことなんだな。最もバカらしくない奴は、自分がバカだと思ってる奴なんだ。バカな奴がバカとは何かを考えると、こじつけになるんだな。そうか、それでわかった。煙に撒かれて、心細くなったのは、俺はバカとは何かゞ解らなかった事がわかったんだ。俺に解った事は、一番バカらしくない奴は、自分が一番バカだと思っている奴なんだと云う事が解っただけなんだ。

自分がバカだと信じて、人を愛し、人に慕われて、面白すぎず、つまらなすぎもせず、皆に協力してやれる奴がバカから一番遠い奴だと云う事が解っただけなんだ。何にもこだわらずに、自分が一番バカだと思って、人の気持に素直な奴がバカから一号遠い奴なんだな。

最後に、騙して煙に撒く秘密を解かなきゃなるめえ。騙すとは、よそおう事だろう。本当にバカだと信じてるんじゃなくて、バカらしく装って、常の度を失しなわない奴さ。一見バカのようで、人を煙に撒いてる者は、本物のバカと思ってる奴とは違うのさ。それが解るのは、こんな奴をほめると、喜こんだり、自惚れたり、反対に怒ったり、嫌な顔したりこんなのは皆うそっぱち。自分をバカだと信じてる奴は、悲しそうな顔でもするだろう。

バカとはやっぱりあて字だよ。バカの云う事には罪がねえのはあたりまえ。バカは果報者なのさ。それで、自分が一番ガカだと信じてる奴には、バカに付ける薬りは必要ねえんだな。ウヒヒヒ、ヒヒ、ヒヒ、バカは死ななきゃああああ直らねえええええー。

＝特別寄稿＝

牛技肉のサシ霜降と価格の関係

板橋功芳

牛技肉の取り引きにあたってその商品価値、価格を決める要素はサシ、脂肪、肉質、肉の色沢等が上げられるがもっとも重要な要素はサシが価格を左右する絶対条件である。

「サシ」の入りいかんが価格決定の重大な要素となりつつある傾向にかんがみ、ロース芯のサシについて、牝、去勢のそれぞれにつき、または性別の比較について肉牛の大きさとサシの入り具合ならびにサシと価格傾向についてとりまとめてみますと次の通りである。

㈠牛技肉取引規格又は価格は、一定の要領によって整形し冷却技肉を二分体（半丸）の第五肋骨間にそって平直に切り開き、ロース芯の状態がわかる様にしたものよって、取引規格又は価格が決られる。

これらの取引価格の最も重要項目はまず第一技肉の重量（半丸最小重量）第二外観（均称、肉づき、脂肪付着、仕上げ）第三肉質（脂肪交雑、肉の色沢、脂肪の質）等について取引価格の決がこれらの項目によって全国的に取引されている現状です。

㈡牛技肉取引の場合の価格の決め方は、技肉規格で決められている項目が色々あって、その総合評価によって決められることになるが、その要点は技肉重量と肉質特にサシに重点がおかれる傾向は近年特に強く言われるようになった。

技肉の最小重量と脂肪交雑（サシ）は絶対条件である事は前文でのべた通りである。そこで次にサシの多少についての要因はいろいろあって、素牛からいえば品種、性別、資質、年令、系統等も関係するだろうし、その他飼料の種類、給与の時期、配合の割合い、肥育期間、肥育の程度など関連する事項など多いが、従来係数的に調査した資料は少ない。

これらの問題は今後素牛の改良にも波及してゆくものと思われる。つまりこれまでのように外貌のよい牛を素牛として肥育し、肉牛を生産して行くだけでなく逆に出来

上がった肉牛を検討して割安に生産され、しかも割高に売れる傾向の牛を逆算して素牛の改良と結びつけることが早く経済性を高めることになるだろう。最近各地で行なわれはじめた和牛産肉能力検出も、種牡牛の産肉能力を判定し、優秀な系統を普及させて行なうことにほかならない。

汽車

畜産二年　足立正孝

「新幹線」などという単語はもう珍らしくない「世間の噂も七五日」というが二ケ月半どころかもう半年が経ったからである。しかし田舎から出て来ている小生のような一風変った男がどのように思ったか――これを少し述べてみたい。

十二月二十四日（クリスマスイブとやらの日で新宿の繁華街はおかしな装飾を店内外にベタベタと飾っていた）夏休み以来五ケ月もクニへ帰っていないこの一年坊主はとにかく帰りたかったのである。新宿駅の出口へ行った。「名古屋まで行きたいのですが空席ありますか？」（小生の田舎は名古屋から岐阜へ行き高山線に乗って行くのである。）すると駅員の返事が「一月一日なら壁の方に並んで待っていて下さい。」というのである。みると二四日にもう一月一日の切符を買う為に並んでいる人が五十人ばかりいた。「いや二六日までので欲しいんです。」というと「そんなものないよ。」少し口調が荒らくなって来た。「新幹線ならある。」という事だった。急行、準急で行くと夜中か早朝に東京駅を出るのがほとんど――早起きの苦手な小生にはそれを選ぶ気がなかったし、少しぜいたくだが車内の混雑するのが嫌いな小生にはそれを選ぶ気は起きなかったのである。――しかし余分に八〇〇円也という金が必要である。「そこで俺は考えた」のである。

「ハイライト」を「いこい」に変えて四十箱で八〇〇円は浮くのであるが少しこれは痛かった。（云い訳をしておくが手持ちの金は十分あったのである。）よく考えた上で買うことにした。三つばかり空いている二六日のこだま一〇七号であった。窓口に千円札二枚出した。（少々悲しかったけれど。――）

二六日、「今日はやっと帰られる日」である。八時に起きて東京駅へ――九時二十分ごろ白とブルーのツートンカラーの列車がホームへ入って来た。最後尾の一二号車である。テレビヤ新聞で聞いていたけど中へ入るのは、

はじめて――気がつかなかったけど胸の中はドキドキしていたかもしれない。

三列と二列の座席がきれいに並んでいる。

列車は出た。スーッと出た。ガタンとはいわない。気がついていたら動いていたという方がぴったりするかもしれないが、「鈍感だな。」とおかしなところで感心しないで欲しい。

列車は快適だった。隣席にすわった御婦人もワクワクしているのか窓の外を見てキョロキョロしている。（蛇足かもしれないがお世辞にも「きれい」とはいえない人だった。）

「こだま」故に横浜の田んぼに停車したり、ワリとのんびりしていたけど速い――

三時間ほどで名古屋についた。よく揺れた所、地盤沈下で徐行する所などもあったけど快適なものだった。これからも時々乗せてもらおうと思っている。

最後に付け加えるが高山線は非常にゆっくりしていて退屈この上もなく同じ国鉄でこんなに違うものかと思った。

部活動をやってみて

畜産三年　松尾俊樹

寒さもめっきり厳しくなった今日此頃。殺風景な下宿で一人炬燵に入りながら、さて、何を書こうかと迷ってしまったがその迷いもあまり長くは続かなかった。なぜならば、この原稿をあてにしている編集長であり我が親友であるTの顔が目の前に浮び、かみつきそうな気配を示しているからである。そこで、しかたがないので私が今まで所属し活動して来た視聴覚部の事でも書いてみようと思う。

私はこの部には一年の六月頃よりはいったが、遅れて入った関係もあって初めの頃はあまりなじむ事が出来ず部にもあまり出なくて活動らしい活動もやらなかった。しかし二年になってからは心を入れ換えて一度部活動なるものを積極的にやってやろうとばかり大いにやってみた。我が部の主なる活動は土曜映写会、夏期休暇を利用しての農村巡回映画会等。一六ミリ映写機を使用しての活動と八ミリや三五ミリによる大学行事の取材活動との二つに大きく分けられる。そこでこの二つの活動の話で

も書いてみよう。

皆さんはどんな方でも一度は映画を見た事があるでしょう？　しかしそれを映写した事はありますか？　見る側の者は本当に気楽なものですが見せる側に立つてやってみますと実に大変なものです。

まず会場作り、暗幕張り、スクリーンの位置、コードの配線、スピーカーから音が出るか、電圧は大丈夫か等に始まりフイルムの掛かり具合、送り具合、ピントは合っているか、二重になってはいないか等に常に気を配り映写中に少しでもフイルム送り音が変わると画面が流れたのではないかと〝ヒヤリ〟とし、映写を始めてから願い、思う事はただ一つ早く終れという事だけなのです。しかしこれだけの事がうまく行き映画会が成功に終った時の気持は何ともいえないものです。しかしこのごろはテレビが大いに顔をきかせて映画会をやってもあまり入りが良くないのがしゃくの種ですが。

夏期休暇中の農村巡回映画会は実に楽しいものでした。会場を移動の際は自動車を出して貰っていたのであるが、ある村で消防自動車を出して下さり私達は大喜びで乗った事が今でも一番想い出に残っている。今後乗れるかどうか解らないシロモノであろう！　又収穫祭の時にやった名画鑑賞会〝用心棒〟は我々の想像通りの大入り満員となりおことわりするのに骨を折ったという様なうれしい悲鳴をあげた。あの時は二回続けて映写を担当し、いささかへばったが観客の皆様が実に熱心に御覧下さったのでこちらとしても大いにやりがいのあった映写会の一つであった。この様に映写という行為は同じであるが場所と人とが変わるので実に変化に富み楽しいものである。もう一つの大きな活動である八ミリによる取材も又私にとっては楽しいものであった。元々八ミリは家にあっていじっていたので興味はあったので特に熱心にやった。

大学の主なる行事〝オリエンテーション〟や収穫祭等に始まり各部の壮行会や活躍の様子等をニュース形式で取材するのである。野球の一、二部入れ換え戦ではフイルムの使用に財政上の制約があるのでどうなるかわからない試合中の様子は撮る事が出来ず応援団風景とスコアボードしか取材していなかったという様な悲しい結果になった事もあった。しかし収穫祭の時は大いに撮りまくった。都内宣伝パレードに始まり豊受神社の奉納風景、仮装行列、前夜祭、体育祭、文化展、体育部公開演技、と殆んど取材した。

宣伝パレードの宮ノ坂より経堂を経て農大までの徒走行進と仮装行列の取材の時は全く走りづくめで全く参った。前夜祭では劇の最中に照明ランプをつけて怒られたり、

でかい顔をして舞台に上って撮ったりした。全く取材をやっていると気の弱い者でも気が強くなってしまうからたいしたものである。私達取材班は常に〝怒られそうな事でもやれ、怒られる時にはもう取材は済んでしまっているのだ〟という様な調子でやったのであった。

そしてその効果は大いに上がったと思っている。いずれ近い内にお見せ出来る事と思います。この様に部活動を積極的にやったおかげで実に色々と楽しい想い出が出来た。本当にこの一年は部の事しか考えず部の事しかやってこなかった。そしてそのおかげで色々と私自身にも大いに勉強になった。何か一つの事を徹底的にやつてみると必ず自分自身に何か残るものであると感じた。終りに近づいてだんだんおかしくなって来たのでこの辺で許してもらう事にしよう。気のせいか一応原稿を書き終ってみると目の前に浮んでいるTの顔も笑顔になって見えて来た。ああこれで一安心である。もう遅いから寝るとするか！

おやすみなさい。

昭和三十九年十二月のある夜

夜の断想

畜産二年　高崎市郎

僕は夜が好きである。それが静かな夜ならばなるほど。そして今日も机に頬杖をつきながら静かな夜の街に眼をやり、次々とまるで走馬燈のように頭に浮かんでくる様々な事を、この小さな頭で処理し、吟味する。

昼の雑踏から比べると、この静けさはまるで昼の騒やかさ等、とても想像出来ないようだ。仕事や昼の忙しさからの解放感がたまらなく好きである。人はこれを読んで、それは単なるセンチメンタリズムだ。ロマンチシズムだというかもしれない。

人間が忙がしくなればなる程このような時間は減るが、人間がメカニックになればなる程、このような一時はなお一層大切なのではないか？青田三太郎の様に二時間も眺めている必要はない。ただ少しの時間に今日一日の反省や、明日の希望等を考え、自分という人間をしっかりとみつめる事も重要なことである。しかしだからといって、その感傷にひたるのではない。ここで間違ってならないことは、感傷にふけってしまい、自分自身を考える

には考えるが、自分自身の中に入ってしまって、感傷の魅力にとりつかれて、感傷が感傷を喚び起してしまい、マンネリズムに落ちいることである。私のいうそれは自分自身をたぶらかさずに判明に見る事である。（これは大変難かしい事ではあるが）何故なら人間は自尊心があり、又虚栄の動物であるから自然と自分自身をたぶらかす。又一面人間がそれをたぶらかしたなら、それを知っているのは、その人個人だけである。正確には人はたぶらかせても自分自身はごまかせないものであるから。

「人間は弱い葦である」とカントは言っているが、その考えるという方法にも難かしい面があるのである。アフリカの聖者と言われるシュバイツァーも、自分は弱い人間であるといっている。「自分はやろうと思った事の半分もやっていない」と彼の著作の中でいっている。彼においてすらこの言葉がある。人間はどれだけの事をしても後悔というものが残るのである。人間は未完成なものである。未完成なるがゆえに、努力し、自分というものを知り、そしてその前提において他人を求め、自分のもっていない性格を、他人に求め、友情というものがなりたつのではないか。私という人間がこの世の中に生れて来たということも、不思議であり、なぞである。私達は未完成というものを自覚し、その上に努力を重ね、自分という人間とは異った、しかし人間という名において、この世に生命を授って来た者同志として、又他人という意識のもとに、交友を重ね、その努力というものを習慣というものに、不安定なものから安定性のあるどっしりしたものとして確立せしめ、そしてそれに甘えず正しい思考のもとに努力を又重ね、若い人生に一度しかない青春時代というものを過して行きたいと思う。そしてあのカントのいった考える葦でありたいと思う。

いつまでも、サア貴様、お前にはどんな未来があるか知らないが、お前はある目標を定め努力を積んで、自信という者を持ち、その上に、それに満足せず、未完成の自覚のもとに思考し、行動せよ！目に見えぬもう一人のお前（怠惰）と戦え！人間は皆弱いのだ。自信のヴェールを被って強くみえるのだ！

しっかり頼むぞ！お前さん。

ヨイッパリの朝ねぼうめ！早くねろ！

「何事も体験」

助教授　一戸健司

医者の待合室で順番を待っている時程、身をもてあます事はない。最近こんな機会が多くなったせいか、私も人並みに週刊紙をペラペラめくり、お蔭で一般常識にも可成り通じる様になって来た。

「X殺人事件の真相はこうだ」、「Y氏には陰の愛人があった」、「Z汚職事件の真の責任者は誰か」、よくもこう興味本位にすらすら書けるものだと感心したのも初めの二、三回だけ。以後はこれ等の筋書きがどれも似ているのと、目が痛くなるせいか（医者にはつい面倒なので眼鏡を持参しない。そのため普段本を読む時にこれを必ず使用している小生の目は、十五分もたつと必ず悲鳴をあげてしまう。）グラビヤに目を通す方が楽しくなった。あれこれ取上げている内に、ヨーロッパの風景に必ず接する。いや、接するというよりも、むしろそれが出て来る迄本をあさると表現した方が適切なのかも知れない。そして過ぎ去ったヨーロッパ旅行の思出に耽ける。

私の日常生活はたゞ雑用雑用に明け暮れし、たとえ日頃研修旅行の同行者に会う機会があったとしても、その時はたゞ事務的な会話しか取交さない。従つて、既に遠くへと過ぎ去つたヨーロッパの記憶を取り戻すのは、こんな機会に限られるのである。

「パリーの凱旋門と新横綱」、「バッキンガム宮殿の衛兵の交代光景」、等多くのグラビヤに遭遇したが、私はそれらの中で僅か半頁、然も製薬会社のコマーシャルに使われていた、「シャトウ・デイフ」の写真にとりわけ心をひかれた。

その理由は次の様な次第で、当地では思わぬ自由の時間がとれ、久方振りに解放感を味わう事が出来たからである。

さて今回の旅行は、僅か一ケ月で西ヨーロッパを一回りするといった盛り沢山なもので、然も研修というのであるから観光の外に見学もせねばならない。バスは早朝から夕闇迄強引に私達を運んで行く。その上、飲料水も食物も総べてが私達になじまないので、マルセーユに到着した頃には、旅の疲れから一同の不平、不満が頂点に達してしまった。然し世の中とはよくしたもので。バスの運転手もやはり人間でした。「このまゝではとても体がもたないから、休息日がほしい」と彼等がいゝ出したのです。事実、その生活はまさに超人的なもので、夕

刻は我々をホテルに送りこんだ後にも車の整備が残って居り、翌朝は翌朝で出発の三十分前には準備を完了、さりとて車の中で我々の様に舟を漕ぐわけにもいかず、見知らぬ道路を日によつては四〇〇Km以上も走るのですから、こんな訳で運転手を休息させるために、思わぬ自由時間、丸一日がころがりこみました。

そうなると人間の心理は微妙に働きます。今迄「下痢だ」「風邪だ」といつて見学をサボつていた連中迄、三々五々をなしてあちらこちらと出掛けて行くのです。私にもこうなると欲が出て来ます。大方の意見は、当地に来た以上「シャトウ、デイフ」か、「ノートルダム寺院」を見ておかないと、帰朝後の顔がきかないという事にまとまりました。そこで私も皆さんの御意見通りにお伴をして、「シャフトウデイフ」に行く船着場に向う。さて船に乗るのはよいが、要求された金額が果して片道のものやら、それとも往復の分なのやら、フランス語と片言の英語をチャンポンに使われてはわかる筈がない。一同困惑していると、P先生が素早く、「この船で帰つて来ればこの料金だそうだ。乗り遅れると別に又とられるぞ」と判定を下されたのは、さすがに常日頃の人徳の致すところと感じ入った次第。そこでお説通りに金を払い、一先づ船になだれ込んだ。

マルセーユの町は総体的には、一見浅草近辺を連想させるゴミゴミしたものであるが、一度び海に船出して眺めていると、次第にこれらの街角は視野から消え去り、丘にそびえ立つ寺院の塔や、岩壁に停泊中の客船のみがクッキリと浮び出し、素張らしい光景へと変化して行った。水はあく迄も青く澄み、その上を赤や黄色の帆に風をはらませた無数のヨットが縦横に走り、十月の上旬だというのに、岩壁には水着姿の多数の男女が甲ぼしをしていたり、次第に近づく岩窟島の異様な姿。島の船着場には客がむらがっている。近づくにつれてその輪郭から、その過半数がノーダイグループである事が判明した。しばし異国にあるのを忘れさせる光景である。彼等の話しを総合するに、私達と同様船に置いてきぼりを喰うのがこわさに、駆け足で見学を終了し、目下待機中であるとの事。言葉の通じない心細さは、まさにいづこも同じといったところである。

坂を急ぎ足で上り、中世紀の姿をそのまゝ止める城の中へと列をつくる。中庭に堀られた古井戸の異様な光景、薄暗い土の壁、「こんなところに幽閉されていては、モンテクリスト伯もさしずめノイローゼといったところかな」。こんな事を考えながら真暗なラセン状の階段を手さぐりで登つて行く。途中で下りて来た人にぶつかれば、

誰彼を問わず「パードン、パードン」の一点張り。屋上からのマルセーユの遠景は、まさにミニョンの「君を知るや南の国」の歌詞そのまゝ。記念撮影と休息五分で、私も御多分にもれず船着場に急ぐ。然し驚いたことに、既に同船者の多数は集つて、沖に停泊しているボンボン船を指さしながら、「あれだろう。いや、マークが違うからこっちだろう」と話し合つている。やはり言葉の全く通じない異国ともなれば、普段の楽天家も心配症の僕と同じになるものとみえ心強く感じたが、これも一時的なものらしく、マルセーユに上陸するとせつかく来たのだから、次は「ノートルダム寺院だ」とさつきの心配もさらりと捨てゝ、あたふたと出掛けて行く。全く勝手なものですね。

私は此の度の旅行でほんとによい体験をしました。国内はとも角として、いやしくも外国に行くからには、一度にあまり欲ばつてはいけないという事を痛感しました。先づ第一回目には下見分に行く位の積りで、自分の習った語学がどの程度通用するものか、又本や案内書で得た知識が、果たしていつ、どこで、どんな形で現われるかを身をもつて体験するという程度に押えておいた方が、かえって収穫がある様に思いました。そして更にまとまった何物かを得たいと思う場合には、前回に得た予備知識を生かして再びその土地を訪ねるか、再度の訪問が不可能な時には、スケジュールを欲張らず、少くとも一都市に数日は滞在する様にしたいものです。

私個人についても、現に日程にも余裕があり、言葉もどうやら通じたロンドンでは、何んとか一人であちらこちらにも行かれたし、買物のお手伝いやら、ホテルでは鍵を室内に置いたまゝ扉をしめ、困りぬいている方々の通訳等で、少しはお役に立つた積りである。

私が出発する時に、「せつかく行くのだから、大いに収穫を得て来て下さい」と激励して下さつた方々には、真に申訳ない結果に終りましたが、短期間の海外旅行とは総じてこんなものだ、という真相を述べるために一筆したためた次第です。

旅の断想

三年　羽田蓬月

私の眠りをさましたのはあのいやな夢であろうか、それとも車窓から流れ込んだ冷えきった晩秋の空気であったのか。窓を見た私のはれぼったい睡眠不足の目にうつ

ったのは真白く霜のおりた畑、そして畑の奥に見えるわらぶきの屋根、その庭先の柿の木に取り残されたのであろうか、朱色の実がぽっんと一つだけ、とうに葉の落ちてしまったさむざむとした梢についていた。その一つのカキだけが私の目を強くとらえた、と思うまもなくそれは私の視界から流れ去って行った。それからも私は窓の外の景気をながめながら頭の中ではさっきのカキの実のことを考えつづけていた。そしてふとそんな自分に気がつくと私は苦笑した。私があのカキのことを考えていたのはきっと、取り残されたようにぽつんと一つだけついていたのが、愛する人と別れ、その苦しさにたえられなくなって旅に出て来た一人ぼっちの自分の姿のように思えたからであろう。そういえばあの娘は赤い色が好きだったっけ。赤いセーターをはおって小首をかしげたあの娘の姿が浮んで来て目の奥が熱くなった。そんな自分がみじめなように思えて私はつぶやいた。「忘れるんだ」

……

白い畑はまだつづいていた。汽車はその中をあたりの空気をふるわせながら走りつづけた。

二

「今どこだすか」、そんな声に私は窓から目をそらせてふりむいた。旅行カバンにひじをつき週間誌を手にした初老の男が笑いかけていた。「さあどこですかね」私は私の行為を妨げたこの男にぶっきらぼうに答えた。しかしそんなことには無とん着に男は私に話しかけた。「お一人でっか、どちらまで行きはるんでっか……」私の姿に興味を持ったのか、本を読み切ってしまって手持ちぶたさなのか、こちらの答える間もなく次々と問いかけるこの男に私はいらだたしさをおぼえた。しかし他人の感情とはおかまいなしの人のよさそうな顔をみているうちに私は不思議に心のやわらぎを感じた。男はつづけた「わては東京にいる孫に会いに行って来たんだす。来年幼稚園に入るんでっけどな、そりゃ可愛いおまっせおじいちゃん、おじいちゃんて、でもしょっちゅう会いに行けんのがつろうて……」そんなとりとめもない話をききながら私は自分の顔に笑いが浮んで来るのがわかった。それはこのほほえましい男の話に心がうごいたのか、それともそんな自分の心に対する自ちょうの笑いなのか、私は心にうけた傷にたえられなくなってこの汽車に乗った。しかしそんな私の心とは無関係にこの汽車は走っている。この中には前に座っている男のように孫の顔に満足しきって帰って行くものもあれば仕事に追われて汽車のスピードにいらいらしている者も、この人生のスタートに心おどらせている若いカップルも、それぞれみんな

他人の感情とは無関係にこの汽車にゆられ自分の人生を生きているのだ。それなのに私はこの世の苦しみのすべてをせおい込んだような悲痛な気持ちでいた。そんな自分がとてつもなくこっけいに思えて来て私は又笑いがこみあげて来た。しかしその笑いは何かむなしいものであった。そして私はこんな言葉を思い出していた。「孤独は一人でいる時には決して感じない、多勢の人の中にいてまわりの人間はみんな自分とは縁もゆかりもない、自分とはまるで関係ないことを考え生きている。そう思った時何とも言いがたい孤独感がおそって来るものなのだ」どこで読んだ言葉だったか、しかし私の今の心はまさにそれではないだろうか……　さっきの男は私の気のない態度にそれ以上の話をやめて又週間誌に目をおとしていた。

三

はく息がそのままこおりついてしまうような、そんな感じさえうけるこの高原の霜柱の道に私は降り立った。ゆるやかに起伏したスロープは茶色く、くすんだようにどこまでも続いていた。しかし空だけはそんな地上の暗さにはむかうかのように青く澄みわたっていた。そして登ったばかりの太陽が水たまりにはった氷に反射してキラキラと輝いていた。その光が私のにごった心の中をつき通し、その空の青さが私の心を洗い流して行った。汽車の中でのことがみんなずっと遠い過去のことであったような不思議な空白感があった。私の横を元気な若者達が声をかけて通り過ぎて行った。その後姿に答えながら私は思った。「やはり私はこの旅に出てよかった。このさわやかな高原の空気はきっと私に明日からの希望を与えてくれるだろう。そして私は又以前の生活にもどることが出来るだろう。いつか又心に苦しみをせおったら旅に出よう。そしてその苦しみをぬぐいさろう。そうして生き続けることが人生なのかもしれない。さあ元気よくこの道を歩き続けよう……」足もとの朽れた草陰から、小鳥が澄み切った大空へ飛びあがって行った。

—完—

生命

畜産三年　成木青彦

私は自然の奇跡的な創造物たる生命を確かに存続せしめている。他のものと共同してこの社会を構成しているのである。私は他のものが行っていることを実際に、私

自身もそれらに負ないぐらい熱心にリズムをとり続けなければならないのである。私はまだ信じられないくらいだ、あの時に較べて現在の私を見ろ、自由である。この通り、自分で自身の生命を保とうとしているではないか、他のエリートと同じように私も自立している。だが、まだ、完全に独立しているのでなく、もう一つの生命に助けられており、それは他のものと違って何か特別な絆によって結び付けられているのであって、その結びが切れたならば、私はあの時と同じような状態になつてしまうようで、非常な不安を感ぜざるを得ない。しかし、存在せしめた以上、そう簡単に消滅させられない、たとえ、その結びが切れたとしても、あの時のようになるぐらいなら、全く無に帰したほうがどれほど幸福を味わえるか、わからないだろう。私は最高のエリートだ。なぜなら、私は考える力を創造せしめたのである。それは永遠なるものであり、あらゆる可能性を秘めており、高度の精神作用にほかならない。

「ああ、あの時私は何所に居たのだろうか？　単に無にすぎなかったのだろうか？　それとも、何ものかが創造し形成してくれたのであろうか？」私はあの時何かの中に存在していたように思え、その中で私は四方の障害に対して持っている全力をぶち当てていた。それは決して自分の思考の結果ではなく、単に、むなしい努力を繰り返すだけであった。どれほど時間が経っただろう、その強固な障害は僅かずつではあるが薄く柔軟に成ってゆき、それに共なって、私の速度は大きくなり、幾度か、その薄膜を破ぶろうとしたけれど、私だけの躍きではエネルギーの浪費にすぎず、どうにもならないことであった。彼の助力無くして障害を克服することは不可能だったのである。しかし、それは当然起るべくして起った。私を束縛していた粘っこい障壁は完全に打ち破られ、満ちていた液体は激流のごとく流れ出たが、その瞬間、私は無数のものを見た。それは気の遠くなるほど無数の私であり、それらがある方向に向って懸命に泳いでゆく、勿論、私も本能的に必死に追い鋪ってゆく。解放されたのは狭苦しい圧迫感からの休らぎのためでなく、実に、その競走のためであった。何のために必死になって、全力を振り絞って、今までの疲苦すら忘れてあれほどまで、懸命に泳がなければならないのだろう。その目標は何なのだ。それに答えるものは誰もいない。おそらく、彼らも解っていないのだ。ただ、ひたすらに目標へ到達するために進んでいるにすぎない。

私はそのうちで最も強かった。唯一の勝利者だったのである。すなわち、この事は他のすべてのものの死を意

味しており、完全なる撲あるものは揺れ動く柔かい壁にしがみつこうとしていた。そうすれば少しでも生命を長らえられると信じたわけでもないのだろうが、それとも、その壁に目標への近道か、又は、希望する新世界への道に通ずる穴がありやしないか、と全く可能性のない望みに全力を尽いやしているのだろうか。また、あるものは私をも圧倒しそうな勢いで私に追いすがり、最後の試みに全努力を払っていた。彼の尾は今にも振りちぎれそうである。しかし、それらの努力はすべて無価値なものであり、もう少しで、私を追い抜き、目標に達しそうだからといって、それに何の価値があろう。私の栄光のお零れにすらあり付けやしないのだ。結果的には無行動に等しいものとならざるを得なかったのである。

狭苦しい囲壁から解放され、生死を賭けて一斉にスタートしたときが私の頭の中にはっきりと浮び上ってきた。あのときの彼らは、ただ、目標に到達しようと前進する本能的作滅を意味しているのである。前進している間、私は前方を進むものに追い着いて、その尾を引きちぎり、頭を押しつぶした。後から追い着こうとしようものなら、私の強靱な尾で振り払い、叩きのめしてやった。激しく抵抗しようものなら、ぐるぐる締めあげて、その丸い頭を二つにしてやった。今やもう、私は競争の先頭を泳ぎ、一点に目を向けて全力で進んでいるのであった。私の後方にはおそらく敗北者になるであろうところの、彼らの長い列がえんえんと続いてはいるが、私の速度が増すに従つて彼らの速度は減少し、なかには完全に静止してしまったものすらあるだろう。彼らは生命の持続を全く断たれた敗北者であった。あるものは力尽きたように液中に浮び、流れにまかせて暗黒界へと漂ってゆき、時々、尾を力無く動かしはするが、そんなことをしても無意味だと、あたかも自分で自覚しているかのように方向性を失ったものであり、後から来るものの邪魔をするのみである。用のみで、他のいかなる因子もその作用に影響を及ぼすことはできなかったのであるが、今の彼らは絶望感に打ちひしがれ、なすすべもないのである。私の自信ある、そして、確実な前進に較べて、それらの前進ののろいことは、私がある引力圏外に脱出してしまったとすれば、彼らはその内側で必要以上にあがくだけで、次第に強く感じるようになる引力を振り切ることはもはや不可能であり、そのエネルギー消費を待つのみであることにたとえられるであろう。しかしながら、私はそのような回想や思考の間にも、目標を見失なわないような前方注意は、決して怠らなかったのであり、如何なる不着実な行動もしなかった。なぜなら、私の目指している所が

私の生命を持続させるのに、その必要条件をどれほど完全に満足しているか、私にはその本能的霊感により把握できたのである。かくして、私は自然により創造せられた力、すなわち、肉体的力によって第一の関門を克服することができたけれど、その完全な環境のもとで成長したとき、その後に私を待っていたのは、またしても、数限りない敵対者であつた。ところがそれには最初の競争と本質的に異なる要素が介入しており、それゆえに、人間たりうるのである。すなわち、人間として誕生したその瞬間から、私の内部に存在していた精神的因子が活動を開始し、まず感知できるあらゆるものに興味を示すことから始まって、それらを記憶することにより、より高度の知性へと発達してゆく。そして、その結果として、抽象的描写を成し得る想像力、空想力へと発展してゆく精神作用、これこそ、単に、自然より与えられた一次的な因子でなくして、私なる生命体が独立して発達する因子なのである。それにより、敵対者も協力者に成し得るし、共同して、全人類の精神的発展に寄与できる人間に成長することこそ、その最大の目標とすべきなのだ。





詩

「愛する」

B・B生

如何にふたりは離れても
　心を結ぶ書簡集
開ける中身はバラの園
　愛の花咲くその中で
今日も語ろう君と僕

今日も君に逢えねども
　心に残る思い出と
駈ける野山はバラ色の
　愛の夕日に包まれて
明日を夢みる君と僕

彼女からの手紙

B・B生

僕の心をこんなに動揺させた手紙！
待ちに待った手紙が遂に届けられた。
この手紙は君から郵便屋さんを通して僕の元に
でも、この大切な手紙は君の心から僕の心へ運ばれたものだ。
どんなに遠く離れていてもこの手紙が僕に届く時、
僕達の心は一つなのだ。
君の優しい香りを思い出しながら封る切る楽しさ。
ほのかな愛が一瞬僕の胸に吹き込む。
心をわくわくさせ目を走らせる。
何度も何度も、暗記する程、僕は読み返す。
そして最後に君のサインの上に、そっと口づける。
もう一度静かに目を通す。
愛する君を想いて！

「自　然」

K・H生

澄み切った青空高く我々の理想は飛ぶ
雲一つない大空は、諸手を差しのべて
　我々を招いている。
自然は無限であるが可愛い子供の如く
　美しい。
自然の奥にも自然があり、
　自然の手前にも自然がある。
私達の住む地球も自然の一つである。
この自然の世界を探る望遠鏡がある。
自然の奥の暗黒の世界にレンズを
　伸すことができるとすれば
　自然の端がのぞかれるかもしれない。

自分自身の戦い

畜産四年　前川浩平

子供の頃に比べだんだん大人に成るに徒って自分の邪心をおさえその時、場所、相手等を見きわめ最も適した振舞をする様に成る。良く考えて見るとこのことを常に守っている人はそうざらにはいない。若い頃は精神的に未熟くで不安定なため傲慢に振舞ったり、反抗して表面的にごまかすことが多い、だんだん大人に成るに徒って精神的に安定し感情あるいは動物的本能等を上手に処理し苦難な問題も冷静に判断し解決出来る様に成るに徒って人間らしい振舞が出来る様に成る。しかし単に年令の増すことのみによって人間らしく成るのではなく日常の生活における外部の刺激によってあるいは自分の内部におこる邪心を良心によって征服することが可能に成って始めて本当の意味での理性ある人間が生れる。この世に生れ落ちたことは行動し仕事をすることを意味するが、単なる動物でなく人間となるためには母性愛、親しい間の愛を越えて人間全体を愛すること、動物的本能によって支配されず人間全体の為に成る事である。勉学し知識を得ること又柔道、剣道、空手その他のものにより技術を得ることは大変良いことであるが更に大切なことはこの知識あるいは技術を人間として恥しく無く教養ある人間として最も適した様に使用することである。

即ち邪心を征服し良心としてそのとき、場所、相手に最も適する様に使用することである。

『公衆道徳』

畜産三年　T・S　生

昨年十月に行われた東京オリンピックは、大成功のうちに幕を閉じ、オリンピック以前に、やかましく云われていた、公衆道徳も三カ月経過した現在、しだいに忘れられて来たこれを、もう一度新めて再認識しようじゃありませんか。

一般的に、公衆道徳とはどんな事か、辞書によると『社会の人々が、心を合せてお互いに守るべき道徳』と書いてある。では道徳とは、それは『社会生活をよりよくする為に、守らなければならない事柄』である。という様に、漢字の意味は誰にでもわかるのであるが、実際にこれを守っている人が、何人いるだろうか。云うに及ばない極く少人数に過ぎない。例へば、交通信号について考えて見よう。交通信号を忠実に守っている人が何人いるだろうか、横断する人の半数以上は、黄色で横断しています。しかし自分では、赤信号は注意し、黄信号は、安全を確かめ、青信号で横断するという事は、みんな知っていると思います。知つていながらどうして守らないのだろうか。

その理由は、色々あるであろう。例へば、公衆道徳の重要性の認識不足又すべての人への浸透不足等沢山ある。では公衆道徳が、守られなければ、どんな事態になるだろうかまず公共物破損を初めとして、私物以外のものは、すべて道端はゴミの山と化し、公園の施設、木々は、公園一面に散在しあらゆるものの機能が絶たれるだろう。これは、ひいては集団というが、分裂し社会は混乱をきたし、国家というものが、統制されなくなるであろう。

J. F. Herbart がいった様に、道徳とは、一般的に人類の最高目的だと認められている。従ってそれは教育の最高目的でもある。最近教育界に於いて、重要視され出した道徳教育は、小中学校に於いて道徳の時間を持つ様になつた。この様に公衆道徳は、親が子供に、厳しく行う躾と同様に、国家が国民に行う躾である。故に子供を厳しく躾するのは、道徳を守らせる為の一手段ではなかろうか……

公衆道徳を守るのは、簡単な様で実際は勇気がいるものである。又公衆道徳を守っている国は、一般に先進国に多いこれは、自国に対する誇りを持ち、国民一人一人が、忠実に守り、互いに注意し合って明るい社会を営んでいるのである。我々も諸外国に誇れる様な社会を築く為に、個人個人が十分に責任を持ってよりよい社会を築こうじゃありませんか。



鶏の品種と系統

白色レグホーン（White Leghorn）

白色レグホーンはイタリア原産の代表的な卵用種で、アメリカおよびイギリスで改良された。わが国でも明治二十年以後たびたび輸入され、現在最も飼養羽数が多く、全飼養鶏の約四〇％を占めている。

全身白色羽装で優性白（I）の遺伝子をもっている。羽毛色の遺伝子型はI-B-（B）C-C-が代表的であるが、E-E-, S(S)がee, s(s)に変っているものもある。単冠（rr pp）、速羽性（k(k)）で、皮ふは黄色（Id(Id)ww）である。体格は比較的小型で、ひなの肥育性は悪く、ブロイラー用には適さない。雌の初産体重は1600～1700g満一年の成体重は2000g、雄の成体重は2500gである。

最近アメリカから盛んに輸入されている産卵鶏種の多くは、その鶏を作育した会社の名前（コマーシャル・ストレイン・ネーム）で呼ばれているものが多く、白色レグホーンの系統間交配種のもの（例えば、ハイスドルフ、キンバーなど）と、白色レグホーンと他品種との交配から合成されたもの（ハイライン、デカルブなど）とがある。

白色レグホーンの産卵性はきわめて優秀で、一年間に三六五個の卵を産む個体もある。よく産む系統では初年度二四〇～二六〇個の産卵を示す。初産日令は早く一五〇～一七〇日である。卵殻色は白で、卵重は系統により異なるが五四～五七gである。就巣性は殆んど認められない。

――畜産の研究　第五号より――

研究室便り

畜産製造学研究室

鬼原研究室

畜産製造学研究室は昨年七月二〇日を以って研究室の充実と発展の為に肉・卵部門と乳部門とに別れ肉・卵部門は新しく畜産製造学鬼原研究室と改名された。

現在本研究室では

一、肉及び肉製品の保存に関する問題

一、動物油脂の酸化の問題

一、動物及び家禽類の脂肪酸組成の問題

等の問題を主として追究し、鬼原先生の御指導のもとに室員一同一層の研究と研究室活動に励むつもりでおります。

乳利用学研究室

従来その古い伝統のもとに、ますく発展されております畜産製造学研究室より、学術の日進月歩に何とかしてついて行かなくてはという考えと、将来の畜産製造学への希望者が近年特に多くなった事等から、乳利用学研究室は昨年七月にその設立をみたのであります。その意味からも我々はプライドと大きい興味を持って研究に、勉学に又研究室発展の為に日夜励んでいます。現在の四年生はそういった中で強い意志のもとに卒業論文に取りくんでおられました。我々三年は山中先生の下に四年生を助け何とか我が研究室の発展をと願い一致団結して頑張っています。何ぶんにも実験室も先生の部屋も同じという非常に厳しい状態である為、不便を感じていますが、それだけにどこよりも我々室員はお互いに助け合ってまとまっていることが一番の誇りと感じているところです。

研究室は先生・先輩・後輩在ってのものだと思う。いずれが無くても運営はうまくいかないでしょう。我々は先輩は先輩として、先生は先生として、夫々の立場を重んじ、尊重してあくまでも先生、先輩に従って学問の道だけでなく、人間的なものをも吸収しようと努めています。毎週二回のゼミナールには先生の御指導のもとに先輩と我々とが、自分のもつ知識を全部出し合ってお互いに教え合い確かめ合う質問と討論の場を作ります。

最近の傾向として畜産の中にも色々と分化し夫々専門的に深く掘り下げて研究される様になり、畜産という第一次産業であるものが、我々の乳利用学という分野では二次的に発展し今では畜産学はもとより工学、物理、化学の方面にまで及び、乳業と云う食品工業に迄発展しておりま

す。しかし我々は畜産人として乳利用学という分野を研究し、将来の日本農業発展の片棒をかつぐものとして重要な学問である事を室員一同認識を新にして頑張っている事をお伝えすると共に、乳利用学研究室の発展を約束して我が研究室の紹介を終ります。　室員二十八名　卒業生十一名。

（三宮　記）

飼養学研究室

当研究室は昭和三十五年四月、茂原分校時代に設置されたものでその構成は次の通りである。

主任教授　農学博士　海塩　義男
講　師　伊藤　澄麿
講　師　医学博士　杉村敬一郎
副　手　西田　修
研修生　西松　一郎
学生室員　三十八名

研究活動の目的は言うまでもなく家畜飼養の基礎的、応用的学問の追求であるが、今後の具体的な研究課題としては次の二つに大別することが出来得るだろう。

※継続的な研究課題

一、本邦に於ける慣用飼料の飼料的価値。

一、各家畜に於ける従来の飼養標準の検討。

一、各種配合飼料による産卵試験及び乳中の泌乳試験。

※比較的断続的な研究課題

一、特殊飼料の調査

一、添加剤の効果

一、微量成分の効果と家畜体内に及ぼす影響

これらの研究課題を通して週二回のゼミナールでは原書注解、室員の研究発表が活発に行なわれ、又、三年生は飼料分析を徹底して行い、あるいは四年生の卒論について四年生と共に研究することにより今後行う卒論その他の研究の基礎を作っている。又、春と秋に見学旅行と一泊の親睦旅行を各々行い学習心を盛り立てあるいは一層人間関係を親密にしている。又、これらの成果は年一回発行される室報「飼養」にまとめられ、関係各方面に配布されている。

尚、当研究室の卒業生はOB組織「千と世会」を結成し飼料界に於て盛に活躍が続けられている。又、東京農業大学飼料研究所が当研究室内に設立し、十二月五日より発足する。その構成は次の通りである。

所　長　海塩　義男
顧　問　内藤　敬
〃　〃　西川哲三郎
〃　〃　佐橋　喬
〃　〃　平林　忠
〃　〃　高木　五六
研究員　海塩　義男
〃　〃　鈴木　隆雄

研究員　伊藤　澄麿

このことにより一層広く、深く研究されるようになると思う。以上のごとく、海塩、伊藤両先生を中心とする当飼養学研究室は、厳格な研究活動、親密な人間関係を通して良き社会人としての基礎を造り又、学生生活最後の良き思い出を作り得る場所となるであろう。（前川　記）

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室は鈴木正三教授を室長に田中一栄講師、渡辺誠喜講師、並びに家畜血清学研究助手及川勤氏の諸先生と、研究室を卒業された先輩によって構成されている特別室員、専攻学生によって構成されている普通室員によって組織されており、畜産学科の進運と共に家畜育種学研究室の発展はめざましいものがあり三八年度卒論に於ては学長賞、学科長賞を受賞しその充実ぶりは室員の誇りとするところである。

研究室には実験動物として山羊、緬羊、兎、モルモット、家禽などが多数飼育され学生の探求心を満足させ、また常に動物に接しながら各種の現象を探求する機会が多く室員は恵まれているのではないかと考える。

研究対象も一般育種を始め免疫遺伝学など広範囲に及び学生の希望する研究の場を提供している。外部調査活動も毎年実施され、多大の収獲を得ていることは特筆すべき研究室活動の一環であり、三九年の夏には本学、名古屋大学、鹿児島大学の三大学合同調査として琉球地区における在来家畜の調査に鈴木教授を団長に活躍し、その成果は日本畜産学会や関係機関に報告されている。また各大学や試験機関の先生方を迎え、特別講演をお願いし知識の吸収に余念がない。すでに名古屋大学・中条教授「鶏の産卵生理に関して」。名古屋大学・野沢助教授「牛の育種について」。畜産試験場・細田技官「牛の血液型に関する研究について」それぞれ講演があり、また先日家畜育種学研究室の初代教授である佐々木清綱博士の講義もあった。

毎週の活動としてゼミナールが実施され、室員の研究発表、先生方のゼミが行なわれている。

（金城　記）

家畜繁殖学研究室

当研究室は成立して浅いにもかかわらず、室員一同が和をモットーとして努力し、非常に活発に研究しています。又、今年もより一層の発展を信じて活躍します。

当研究室の構成は次の通りであり

獣医学研究室

飼養・繁殖部門と同等の立場で重要視されるべき、対家畜の防疫衛生学分野の問題はとかく軽視される傾向にあるが畜産界に於て多大なる貢献をしている事は云うまでもないのであり、我々家畜を扱う者にとって、又全ての畜産部門の根本的問題として、その必需性を狭まれる訳であり当研究室に於ては家畜診療に関する予備知識の習得を目的とする他各種予防薬駆虫剤及びその他の発育促進剤の効果を実験的に研究している。設備実験器具等の点に於て充分とは云えないが、今後共必要なものは揃えていく積りであります。

又診療所に於て内、外部客の診療が行なわれているので、平山助教授及び近江助手の指導の下に室員達は経験を豊かにしているのである。我々室員は学問的知識、技術を身に付

「卵殻の研究」それに「鶏」の研究も鶏と平行し人工授精の簡易化など、あらゆる部面を研究しています。先輩諸氏より新しい技術的なテーマをも提供していただいています。

ゼミナールは週一回実施、室員の研究発表を中心に教授と共に質疑応答を行います。出席は全員で、予備的な勉強をし活発に実施しています。又、特に書き添えたい特色は、人間形成であります。最高学府としての知識と教養を身につける事を重点的に置き、すでに立派な卒業生を送り出しています。

若いエネルギーを研究と共に燃し、繁殖学の探求に日夜励んでいるところです。なお、年二回に亘り研究室報を発行します。

（小野　記）

ます。

室長　教　授　農博　平林　忠
助教授　農博　一戸健司
助　手　石島芳郎
学生室員　十九名
合　計　二十二名

研究室活動は平林教授による「家兎」と一戸助教授による「家鶏」との二グループに分かれて研究しています。論文テーマは非常に豊富でありますが、主なものは次の様です。

「家兎の喰糞現象」・「性周期」「家畜における人工妊娠」、これは現在関係者では非常に重要視されており、石島助手の下で研究を続けています。又、「排卵現象の追求」や「早期妊娠診断」をより正確に実施する為に家兎の眠房内に卵巣の一部を移植し観察をしています。

家鶏においては「人工授精とビタミン・ミネラルの関係」・「孵化現象の探求」・「雛の機械鑑別」

一、タヒチ豚の観察記録。
一、兎の追っかけ妊娠に関する研究。
一、クローム皮革粉末投与による成鶏体内移行の究明。
一、薬物投与による豚の育成実験。
一、鶏の尻突きに関する研究。

畜産経営学研究室

多摩の野宴は花盛り
土手行く娘は年盛り
終宴なれば、お会計
それじゃ　まわそう計算器

畜産経営学研究室が生れて、四年作詞作曲不明の唄が、この研究室々歌として唄われるようになった。

砂川泰夫講師、吉村助手外総勢三十五名の学生には、唄のとおり食い気、色気そして学問への探究心が、はちきれるばかりにみなぎっている。

畜産振興が叫ばれ、そして畜産経営が脚光あびている。その反面、従来の慣行経営方式をとっているものがあまりにも多くを数える現実に、調べるんだ!!　そしてこの目で見、この耳で聞くんだ!!　そして体で知るんだ!!

自分の手で実際に調べないと納得しない連中が夏季休暇がはじまると同時に「まってました」とばかり東西南北へとびまわる。

三十九年度調査活動としては砂川講師を先頭に酪農班は岩手県、養鶏班は静岡県、岐阜県、養豚班は群馬県へと足をはこんだ。帰ってくる時は資料がみんなのカバンにいっぱい。それから計算器を廻し、そろばんをはじき、調査集計。例年の日本畜産学会、関東支部大会には意気ようようと発表するのだ。

もうける事なら経営研
損することも経営研

ける事がその主目的である事は云うまでもないが、更に我々は全室員の交友を進め、大学生活を意義のあるものとする事に努力しているのである。今年度卒業されました当研究室先輩の方々は医薬会社、養畜会社、官庁関係と多方面に就職された他、自営される方も多く、今後共奮闘される事であろう。

当研究室の構成は次の通りである。

室　長　平山常雄助教授
助　手　近江弘明
学生室員　総員二〇名
（拓殖学科五名含）
特別室員　総員五〇名

なお、今年度卒業生の卒論テーマは次の通りである。

一、燐酸カルシュームの幼雛に及ぼす影響。
一、鶏の盲腸切除による影響。

でかいことなら経営研
今にみていろ経営研

この唄をくちずさむ男たちの手は計算器、目は調査表にくいいっている。そうした彼等の胸の中には、もう新しい畜産経営の将来が描かれている事だろう。そして我々は重大な任務を持っている。暑い中を調査しそこからひき出した結論を実際に畜産にたずさわっている人達に広く還元してやらなければならないのだ。

三十九年度が終る頃には、報告書も出し終え、そして三月には四年生は自分で消化した問題を胸にかかえ巣立って行く。

かわりに海綿の如くすべてを吸収せんと欲する後輩が桜花乱満のもとで四十年度の活動を開始する事だろう。

（前幹事　樋口記）

真の幸せを願うなら
あなたよ
今日の不幸せには
笑って耐えようではないか
友よ!!
明日泣け

昭和三十九年度優秀卒業論文

A学長賞

家畜妊娠診断に関する血清学的研究

向山明孝

従来、家畜の早期妊娠診断法について種々の試みがなされているが、特に妊馬の絨毛に由来する妊馬血清性腺刺激ホルモン（以下PMSGと略す）の証明による馬の妊娠診断は特異なものとされている。現在PMSGの証明はAschheim—Zondekの画期的業績以来、主として動物を用いた生物学的方法がとられている。一方近年、蛋白ホルモンの純化法の発展と、抗体産生を助長するadjuvantの使用により、各種蛋白ホルモンに対する特異的抗体が得られるようになり、ヒト絨毛性ゴナドトロピン（以下、HCGと略す）についてはその抗血清を用いて妊婦尿中、または血清中のHCGの血清学的証明が可能になり、かつ、免疫学的妊娠診断法が考案され、臨床検査に用いられるようになった。PMSGについての免疫学的研究は一九六三年、M. Wideらによって試みられた。著者は高純度のPMSG製剤をRamanおよびFreundのadjuvantに吸着させ、家兎に免疫し抗PMSG抗体を得、この抗血清の特異性、並びにその性状を検べ、更にこの抗体を使用することによる馬の妊娠診断の可否について実験を行い次の結果を得た。

一、抗PMSG抗体の作製とその抗体の特異性及び性状

高度に純化されたPMSG製剤6000 IUをRomanoおよびFreundのadjuvantにそれぞれ吸着させ、一週間隔で八回家兎の腎筋に注射し抗血清を得た。この抗血清は正常雌馬及び雄馬血清で一～二回吸収後各試験に用いた。この抗血清は沈降反応に於いてPMSGの50IU／mlと妊馬血清に対し陽性、凝集反応（タンニン酸処理血球にPMSGを吸着させたもの）では、500IU／mlに陽性、寒天ゲル内沈降反応及び免疫電気泳動法では、共に1,000 IU／mlに陽性

を示した。寒天ゲル内沈降反応に於いて、PMSGの1,000 IU／ml に対する沈降線はただ一本だけであり、又、免疫電気泳動分析でも同様の結果が得られた。

この抗血清を超遠心器により分離した五層のうち、第三層のみPMSGの50 IU／ml に対し陽性を示した。又免疫電気泳動分析に於いて抗体のγ-グロブリン分劃にのみPMSGが反応した。抗PMSGとHCGとの間にはいずれの実験においても交叉反応は見られなかった。又、正常雌馬・雄馬・牛・豚および家兎のいずれの血清に対しても陰性であった。

以上の結果よりPMSGに対する抗血清はFreund またはRamon のadjuvant 法を用いて免疫すれば産生され、その抗血清中にはPMSGに対し特異的な抗体が含まれ、この抗体は沈降素及び凝集素である。抗血清中の抗体はγ-グロブリン分劃にあり、抗A、抗B抗bおよび抗H抗体に比べ比較的小さい分子量のものである。

二、馬の妊娠診断への応用

抗PMSG血清を用いて、生物学的妊娠診断（Aschheim-Zondek 法）において陽性を示した三十四例の血清について沈降反応により検査をおこなった。その結果、三十二例の血清が陽性を示し、二例のみ陰性であった。三十四例の妊馬血清は最終交尾後、五〇～六〇日目に採血したものである。陰性を示した二例の血清は、採血後検査するまでの貯蔵期間が長かった為、血清中のgonadotropin が変性をきたし、陰性を示したものと考えられる。対象である正常雌馬血清（二〇例）、及び、雄馬血清（二〇例）はいずれも陰性であった。以上の結果により抗PMSG血清を用いて、馬の血清学的妊娠診断が可能である。しかし、これを実用化するためにはより感度の高い抗体を作製すること、並びに数多くの野外調査を行うことが必要であると考える。

B科長賞

香辛料の脂肪酸化防止に関する研究

福井通昭

香辛料は燻肉製品其他食肉加工に広く使用され香味の附与風味の改善に資する所大であるが、その香味成分にはフェノール類、テルペン、タンニンなど含まれているが、この様な成分は脂肪の酸化防止にも有効と考えられるので筋肉脂肪の酸化防止について二十種類の香辛料について実験を行いどんな香辛料が脂肪酸化防止に強く関与し、どの程度の作用を及ぼすかについて研究を進めたもので、肉中に一％の香辛料を加え、その対照区（無添加）と比較し腐敗の進行程度を調べたものである。腐敗の程度は筋肉中の脂肪の酸化程度によって判定したもので、脂肪の過酸化物価及びTBA反応値を求めて判定した。試料肉は豚のベーコン部の肉を肉挽器で挽いたものを用いト殺後五日目のものである。試料肉は調製を行ってから15℃に於て五日間貯蔵しその期間中毎日の変化を測定したものであるが、全体的に香辛料を添加したものは対照区に比べ脂肪酸化の進行はやや遅く、香辛料は脂肪酸化を防止することが認められた。然しサンショウに於ては逆の結果が得られ、この作用はないものと思われる。この防止性の作用も香辛料によって強弱があり、強く作用するものと思われるものには、ナッメッグ、セージ、カルダモン、オニオン、カルフイ、パプリカ、黒コショー等が数えられ、あまり強いものではないと思われるものには、オールスパイス、フェンネル、シンナモン、クミンマスタード、白コショー、メース、カルダモン、グローブ、ガーリック、ローレル、ジンジャー等が認められた。

B 科長賞

家畜における背骨運動の比較解剖学的考察

門山裕子

緒言

畜産学において家畜の体型は機能と密接不可分な関係にあり、その家畜の経済価値を判定する資料を与えてくれるので着眼すべき重要点の一つであると思う。

しかし、これを外貌からだけではなく解剖学的に論じたものは少なく、特に機能学的に論じたものは馬において四肢にのみ報告を見出すことが出来るのみである。

私は家畜の構造が四肢を支柱とし背を梁としていると見なした場合、背骨に家畜評価の重要ポイントがあると考え背骨の靱帯標本と曝骨標本を材料にして実験を行なった。

実験材料及び方法

馬（三頭）山羊（一頭）鶏（三羽）の背骨の靱帯標本と曝骨標本で、靱帯標本は個々の椎骨の型体的特徴を説明するための測定材料にした。測定方法は、野村、妹尾、吉田等の機構学的測定方法に準じましたが数学的処理を行わず、投影法から直接運動の持徴を求める方法を採用致しました。

実験成績

一、背椎には固有型があり運動範囲はその型と関係深い。すなわち、湾曲度の大きい程、運動範囲は大で、直線的な腰部以下は少ない。最も大きいのは頸椎である。

二、椎骨の運動は椎間円板を通過する軸によってなされるが運動範囲は椎頭または椎窩、前後関節面々積の大きさに比例する。

三、椎骨の運動は横軸が延長する場合と縦軸が延長する場合、および両者の組合せによって個々特徴的な様相を程するがこれは、頸部および軀幹の運動時に平行を保って力の起点を与えるために背椎としての合併運動に都合良く分担しているものと考えられる。

結論

家畜の背骨の特徴を充分知ることは、家畜にもとめる目的の内容を決定する要点となり、背骨の生理的な運動の特徴を無視する場合には各々の家畜における目的を充分に満すことができないだけでなく、重大な事故や故障などを起す誘因となりうるし、また、このことから家畜改良の結果、その各々の目的に応じた背骨にしなくてはならないと言うことがいえるであろう。

C 三浦賞

家畜の嗅覚について「家畜用フレーバーの嗜好試験及び家畜の嗅粘膜細胞について」

佐藤信哉

飼料フレーバーの研究は主にアメリカに於て行なわれたものであり、特にFlavor Corporation of America (FCA)において組織的に飼料フレーバーの研究が行なわれたものである。

我国に於ては畜産試験場で試験研究が行なわれその結果が一九六四年に森本氏が発表されておる。家畜の飼料にフレーバーを添加する目的は大きく三つに区分される一つは環境の変化等による食欲減退又はビタミン剤ミネラル剤の添加による飼料の味が悪くなった時、二つには体重増加を抑制するために嗜好性の悪いフレーバーを使用する三つには飼料の新鮮度を保持するために抗配化剤を含むフレーバーを使用する以上の様な三つの目的がある。しかしフレーバーを実用化するためには各動物の香料の選択性及び嗜好性を検討する必要がある又フレーバーは家畜の嗅覚と深い関係にあり嗅覚の微弱又は嗅覚能力のないものはフレーバーに興味を示さないと云われていること等から家畜の嗅覚について筆者は各動物の嗅粘膜細胞を組織学的に検索致した結果を要約すると次の様なものである。

ニワトリにおいて使用したフレーバーはHostemorで主成分バターフレーバー、コンフレーバー

Duy Peckmor 主成分 豚ミルクフレーバー

Nutritone 主成分アニスフレーバー ジンジャフレーバーであり飼料の選択率はPeckmorの〇・〇五%添加のみが無添加飼料と同程度の値を示し他のフレーバーは無添加飼料よりも劣って居た。ニワトリと同様のフレーバーをマウスに給与すると飼料要求率で無添加の一八・三二に対しHostmorは一〇・四三Nutritionは九・九六四と云う結果が得られた、無添加に比してNutritionは約二倍の効果が認められた。

ブタに於てはDuy Pigmectin（母乳フレーバー）を〇・〇一%添加し飼料選択率で比較すると無添加四三・七八に対しフレーバー添加が五六・二二%と云う結果が得られ牛に於てはDuy Cowmector（母乳フレーバー）とバターフレーバーを使用した結果Cowmector

においては飼料選択率で無添加飼料が四八・八八%に対しフレーバー添加は五一・一一%である。さらにバターフレーバーに於てみると無添加の四一・三〇%に対しフレーバー添加が五八・六九%とさらに差が大きくなる。馬に於てはCoffee, Nutmeg Cinnomon 及びNutritone Tostemor, Corrt D-五〇〇を用いて試験を行なった結果を飼料選択率でみるとCoffee 一・〇 Nutmeg 五四・一 Cinnomon 四五・〇%及びNutriton 一七・七六 Tostmor 一〇・三〇 Corrt D-五〇〇 七一・七三%と云う結果である。

次に嗅覚能力について検索してみると鼻腔内の鼻粘膜を大別すると嗅粘膜と呼吸粘膜に区別され、嗅粘膜は哺乳家畜では篩骨甲介にのみ存在するがニワトリでは背鼻甲介に存在し色調は牛馬は黄色、マウスは灰色、豚暗褐色、ニハトリ淡赤色を呈しており呼吸粘膜は白色を呈して居る。嗅粘膜はさらに嗅上皮層と粘膜固有層に区別される。嗅上皮層には嗅細胞、支持細胞、基底細胞より構成されておる。嗅細胞は支持細胞と基底細胞の間に存在し核は円形で支持細胞は嗅上皮の上部に位置し核は橢円形を呈する基底細胞は嗅上皮の最下部に一列に配列されることから嗅細胞支持細胞基底細胞の区別が可能である。嗅上皮の一二五μ中における細胞数はニワトリで二・九個マウスで五九・一個、牛では四六・六一個、馬では三八・〇個となる。その他基底細胞数、嗅上皮層の厚さ等検討した結果マウスでは嗅上皮の厚さは薄いが嗅細胞基底細胞数が多く牛では嗅上皮が厚くさらに嗅細胞、基底細胞数が多い馬は牛よりも嗅上皮が薄く嗅細胞、基底細胞数がやや少ない。ニワトリでは嗅上皮は厚いがその中に類腺組織と考えられる部位が存在し哺乳家畜と比較することは意義を有しないがしかしながらその厚さは哺乳家畜の牛馬とほぼ同様である。又嗅細胞基底細胞数が哺乳家畜に比較し非常に少ない。嗅覚能力は著者の実験からマウス、牛、馬、ニワトリの順に鋭い嗅覚能力を持って居ると思われる。一般にニワトリには嗅覚能力がないと云われて居るのが通説であるがこれは著者の嗜好試験の結果からも同様なことが云えるのであるが解剖組織学的検索の結果哺乳家畜とは異なりむしろ退化した様な所見を得たのであるが、その基本構造は哺乳家畜と共通し多くの類似点が認められた、従ってニワトリの嗅機能が全くないと断言することはやや早計なことである。

以上のことをまとめると

飼料フレーバーの嗜好性は次の様になる。

フレーバー	ニワトリ	マウス	ブタ	牛	馬
Tostemor	効果なし	良好			やや劣る
Peckmor			やや良好		
Nutriton	効果なし	良好			やや劣る
Pignector			良好		
Cofnector			良好		
Butter			良好		
Coffee				劣る	
Nutmeg				良好	
Cinnomon				良好	
Corrot D-500				著に良好	

以上の様な事から飼料フレーバーは家畜の種類について嗜好性が異なり嗅覚能力の優れた家畜においてはその家畜に適合した飼料フレーバーを飼料に添加することにより食欲の増進、飼料摂取量、飼料効率等の改善向上を計ることが出きると考える。

D 西川賞

鶏の消化に関する研究

詫摩寿一
樫本順美

E 伊藤賞

鶏における二、三の経済形質に関する性染色体及び母体効果の遺伝学的研究

家畜育種学研究室
中村昌之

鶏の育種を大別すると選抜育種と雑種育種とがあり、前者は主として相加的遺伝子について改良し、後者は非相加的遺伝子効果を利用することにある。本報告は後者の雑種育種における一つの問題点である交配の正逆差異の原因となる性染色体効果ならびに母体効果について研究したものである。

正逆交雑F1間の差異は理論的には伴性効果のみならず母体効果の関与も存在する。これらを分析するためにはダイアレル・デザインによる分析が適当である。しかし、ダイアレル交配は多くの組数を取扱うことが必要であるので、現実的には極めて困難がある。それゆえ、従来性染色体及び母体を推定する方法としてKempthorne (一九五五)に従って分散分析によるヘリまたタビリテーの推定値から性染色体効果および母体効果をそれぞれ

$2s_h$ と $2d_h$ の大きさから推察する。この場合 $2d_h$ には母体効果以外に非相加的遺伝子が含まれるので母体効果のみを明確にすることは出来難しと考えられる。著者は戻し交雑法を用いて交雑 F_1 間に生ずる差異を解明しようと試み、二、三の知見を得たのでここに報告する。（第一表参照）

ダイアレル・テザリンによる分析にあたっては非相加的遺伝分散は独立に推定され、父系半姉妹、母系半姉妹から推定される分散には相加的遺伝子分散とそれぞれ伴性効果および母体効果が含まれる。それゆえにこれら二者を比較することによって伴性効果ならびに母体効果の相対的大きさが推定できる。しかしあくまでも相対的な価として推定されるところに問題があろう。

第1図　雌鶏における伴性ならびに母体効果の分析法

A）　伴性効果の分析法

母親 ＼ 父親	X^a o $A^aA^aC^a$（純粋種 a）	X^b o $A^bA^bC^b$（純粋種 b）
$X^aX^bA^aA^b$（abF_1 雑種）	X^a o $A^aA^aC^a$ X^a o $A^aA^bC^a$ X^b o $A^aA^aC^a$ X^b o $A^aA^bC^a$	X^a o $A^bA^bC^b$ X^a o $A^bA^bC^b$ X^b o $A^bA^bC^b$ X^b o $A^aA^bC^b$

B）　母体効果の分析法

母親 ＼ 父親	X o A A C	X o A A C
$X^aX^aA^aA^a$（純粋種 a）	X^a o $A^aA^aC^a$ X^a o $A^aA^bC^a$ X^b o $A^aA^bC^a$ X^b o $A^aA^aC^a$	X^a o $A^aA^bC^b$ X^a o $A^aA^bC^b$ X^b o $A^bA^bC^b$ X^b o $A^aA^bC^b$
$X^bX^bA^bA^b$（純粋種 b）	X^a o $A^aA^bC^a$ X^a o $A^bA^bC^a$ X^b o $A^aA^bC^a$ X^b o $A^bA^bC^a$	X^a o $A^aA^bC^b$ X^a o $A^bA^bC^b$ X^b o $A^aA^bC^b$ X^b o $A^bA^bC^b$

X＝性染色体，A＝常染色体，a および b＝純粋種名
C＝細胞質（母体）

一、各発育段階における体重について

WL と BPR の交雑においては八、一二、一八週命に BPR♀× WL♂ がその逆交雑に比して有意に重く母体効果の存在が認められた。戻し交雑群では伴性効果はみられなかったが、F_1 にみられた現象とは逆に F_1（WL♀ × BPR♂）♀ × 純粋種の群がその逆交雑に比して有意に重く性染色体による遺伝情報が母体細胞質を通じて、影響されるものと考えられた。

二、性成熟について

正逆交雑 F_1 では WL と BPR，WL と NGS いずれの交雑においても WL を父親とした組合せがその逆交雑よりも

早熟であった。戻し交雑の結果 WL と BPR，戻し交雑間には有意な差がみられ、この形質では性染色体効果がみられた。

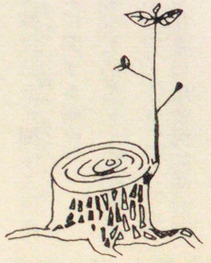
三、産卵能力

産卵指数については交雑 F_1 間の WL と BPR 交雑において、WL♀× BPR♂ が、その逆交雑に対し有意に多産であった。このことは性成熟の長、短が考えられる。しかしながら性成熟日命と産卵指数の環境相関係数を推定した結果非常に低い値であった。このことは F_1 において遺伝子型と細胞質又は性染色体と常染色体の相互作用によって特異的に発現されると考えられる。

戻し交雑においてはいずれの組合せにおいても有意な差はみられなかった。

× × × × ×

× × × × ×



昭和三十九年度
卒業論文題目届一覧表

畜産学科

氏名	論文題目	
阿部正紘	畑作多頭酪農の問題点とその改善	指導教員 砂川
阿部丞成	酪農果樹作経営における労働所得の動向	〃
赤堀賢二	繁殖豚飼育と肉豚飼育における労働生産性の比較	〃
浅井潔	室卵率の算定基準とその指標	〃
朝倉肇	極超短波照射による育雛試験	平山
粟生勝弘	リン酸カルシュウム雛発育に及ぼす影響	〃
千葉多美子	家兎性成熟期の検討	〃
遠藤光路	草地酪農経営における経営経済性の比較	砂川
浜中清明	埼玉県秩父地方における酪農と養蚕の経営的優位性の比較研究	〃
花田真也	水田酪農協業経営の限界収益力	〃
幡生徹太郎	乳酸菌飲料の原液組成に関する研究	山中
樋口宏二	草地酪農経営における経営経済性の比較	砂川
本多一隆	ニワトリの人工授精に関する免疫学的研究―ニワトリ精子による凝集反応―	鈴木
保坂弘文	X線照射鶏肉に関する研究	鬼原
福井通昭	香辛料の脂肪酸化防止に関する研究	〃
古川徳	チーズの熟成に関する研究	山中
古川幸男	乳牛に対する「リンカル」給与の影響	平山
門山裕子	家畜における背骨の比較機能解剖の研究	〃
鹿川文夫	養鶏経営における飼料の経済効率とその論理的実証	砂川
甲斐勝利	甲状腺機能が兎の生殖腺に及ぼす影響について	平山
甲斐森彦	リンカル給与試験（仔豚）	〃
金子信行	繰越鶏の評価方式に対する研究	砂川
樫本順美	鶏の消化に関する研究	海塩
柏倉友也	産卵に要する養分について	〃
加藤栄喜	スペラマイシンの早期離乳豚に与える影響について	海塩 伊藤 杉村

河端謙治	アミノ酸過剰投与が幼雛に及ぼす影響について	海塩 伊藤 杉村
汾陽光紘	肉の消化に関する研究	鬼原
川尻宏	豚の早期離乳においてのリンカル給与試験	平山
菊地英助	青森県の養豚経営生産費構成上の特徴的問題点について	砂川
北川健一	貯蔵鶏卵の乳化力及び泡立性の変化に関する研究	鬼原
北村正雄	γ線照射及び各種添加剤の緬羊筋肉脂肪に及ぼす影響	〃
木津暁	ソーセージの燻煙成分吸収に関する研究	〃
児島寛和	燐・カル給与が乳質に及ぼす影響について	山中
近藤陽	青森県の養豚経営生産費構成上の特徴的問題点について	砂川
工藤吉隆	家鶏の抗病性に関しての育種学的観察	鈴木
熊上肇	産卵に要する養分について	海塩
栗原良雄	酪農経営基準の設定に対する考察	砂川
前川政一		
槇正昭		
町田尚	産卵に要する養分について	海塩
松岡昭善	γ線照射の鶏肉蛋白質への影響	鬼原
宮川博之	乳および乳製品の販売に関する一考察	山中
宮村正人	豚の発育促進剤に対する考察	平山
宮内義雄	ヨーグルト製造に関する研究	山中
宮沢源八郎	自製ホエー及びバターミルクの組成と乳酸菌の発育についての研究	〃
水井一彦	鶏肉の風味と成分の関係について	鬼原
森勇	γ線照射及び貯蔵時の卵黄脂質の変化に関する研究	〃
守田通男	兎に於ける耳疥癬症の治療及び予防について	平山
中村昌之	鶏の経済形質に対する性染色体ならびに母体効果に関する遺伝学的研究	鈴木
中村伸郎	養鶏経営の経済効率に対する論理的実証研究	砂川
新妻敬	家鶏に於ける産卵形質の遺伝力について	鈴木 柴田
野口学	馬の皮膚表面温度に関する研究	平山
岡田宏俊	クロレラの栄養価値に関する研究	海塩
岡田稔	鶏に於けるクロームなめし皮革の粉末給与の影響について	平山

岡松　繁樹　兵庫県下に於ける養豚協同経営の実体と問題点　砂川
岡本　鷹司　ウインナーソーセージの防腐に関する研究　鬼原
大西　吉明　産卵に要する養分について　海塩
大谷　哲生　鶏に於けるCannibalismの予防について　平山
佐川　輝男　原料乳地帯の市乳圏編入にともなう酪農経営構造の変化について　砂川
佐々木　翼　家鶏の繁殖生理に及ぼす非チアゾリウム型B1の影響　一戸
沢畑　誠　養豚経営規模別損益分岐点の比較研究　砂川
柴田　洋司　鶏肉の燻煙成分・吸収に関する研究　鬼原
重田　忠男　糖濃度が乳酸菌の発育に及ぼす影響について　山中
重山　道夫　生澱粉の利用価値の研究　海塩
新川　勝嘉　養豚経営における事故損の現状とその対策　砂川
新谷　信夫　群馬県における養鶏経営の交通立地が経営経済に及ぼす影響　〃
反町　功夫　飼料効率が各家畜飼料費とその経済構造に及ぼす比較検討　〃
杉本　宏　室卵率の算定基準とその指標　砂川
杉山　佳弘　タヒチ豚の飼育記録　平山
鈴木　伸一　北海道三田牧場のエアシャー種について　平林
高橋　宏輔　ブロイラー用品種の肥育試験　一戸
竹内　照晃　鶏の消化に関する研究　海塩
詫摩　寿一　酪農経営基準の設定に対する考察　砂川
田代　正　同種兎疫溶血素による山羊血液型の分類と抗血清の保存試験　鈴木
東海林　弘　養豚経営における事故損の占める割合と弁償法　砂川
土谷　巌　産卵に要する養分について　海塩
鶴元　博之　豚の子宮頸管粘液の性状について　平山
内間　正勝　近郊酪農の乳価構成要素の特異性について　砂川
渡辺　淳一　家鶏における産卵形質の遺伝力について　鈴木・柴田
山口　充　市販バターの保存に関する研究　山中
山田　陸司　孵化場の経営分析に現われた二～三の問題点　砂川
山本　勲　乳酸菌に及ぼすホエー濃度の影響　山中
山本　誠一　保存及び殺菌剤の羊肉脂肪の変化に及ぼす影響　鬼原
矢崎　宗一　鶏肉の食塩及び燻煙成分吸収に及ぼす蔗糖の影響について　〃
吉田　勇　最近の伝書鳩の帰巣性に関する研究についての翻訳　大淵・青木
吉見　周三　乳牛の泌乳に関する研究　海塩・伊藤
川原　昭雄　二、三哺乳動物の染色体について　鈴木・柴田
佐藤　信哉　家畜の嗅覚について（天然香料使用における嗜好性　海塩
天野　卓　A few breeding Olserrotion Japanese Quoil　鈴木・渡辺
伊藤　喜英　鶏胚の奇形誘発に関する遺伝学的研究　鈴木
国宗　達旦　電気透析による牛乳中の人工放射性物質の除去に関する研究　山中
松浦　章仁　ボーワソーセージ保存に関する研究　鬼原
三浦　貞夫　アミノ酸過剰投与が鶏雛に及ぼす影響について　海塩・伊藤・杉村
向山　明孝　家畜の姓娠診断に関する血清学的研究　鈴木
塩沼　信幸　鶏の盲腸剔出による影響　平山
吉田　高士　鶏肉に関する研究――鶏肉各部分の化学成分について――　鬼原
平山　紀世　肉のTBA反応に関する研究　〃

東京農業大学畜産学科
〃畜友会〃規定

第一章　総　則

第一条　本会は東京農業大学畜友会と称する。

第二条　本会は東京農業大学在学生、教職員および卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。

第三条　本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章　会　員

第四条　本会の会員は左記の三種をもって組織する。

一、正会員　　二、特別会員

三、名誉会員

正会員は東京農業大学畜産学科在校生、特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。

第五条　会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章　役員及び機関

第六条　本会は左記の役員をおく。

一、委員長一名　副委員長二名　書記二名
会計一名　会計補佐一名　渉外二名　企画二名　クラス委員八名

二、監査員四名

第七条　本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。

第八条　委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画は正会員の中より総会において計十一名選出する。

委員は各学年二名、監査委員は各学年一名づつ選出し、欠員が生じた場合、速やかに補充しなければならない。

第九条　役員の任期は原則として一年とする。

第十条　総会は正会員により構成され、本会の最高決議機関とする。

第十一条　継会は正会員の三分の一以上により成立する。

第十二条　定期総会は、年一回十一月に召集する。

臨時総会は、左記に該当した場合前一カ月以内に召集しなければならない。

一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。

二、役員の三分の二以上が必要と認めたとき。

第十三条　総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四条　総会に於ける議長は、総会においてその都度互選する。

必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十五条　総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条　総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第四章　業　務

第十七条　第六条一項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、この招集は委員長が行なう。

第十八条　本会の事業年度は十二月一日より翌年十一月末日迄とする。但し会計年度は十一月一日より翌年十月末日までとする。

第十九条　本会は左記の業務を行う。

一、会員親睦会

二、講習会及び研究発表会

三、見学調査

四、機関紙の発行

五、その他第二条に附帯する業務

第五章　会　計

第二十条　会費は年間七五〇円とする。その納入は四ケ年分一括し、入学金と同時に大学会計窓口を通じて納入のこと。

但し転入者は転入年次より正規の手続きを経て一括納入する。

第二十一条　本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。

第二十二条　納入金の払い戻しは行なわない。

第二十三条　決算報告は十月末日までに作成し公示する。

承認は定期総会において行なう。

第六章　監　査

第二十四条　本会の業務を円滑、正常化する為、監査委員をおく。

第二十五条　監査委員は、前条の目的達成の為年度末に

会計監査をおこなう。監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条　監査委員は第六条一項の役員の兼任は出来ない。

第七章　附　則

第二十七条　本会規定解釈の疑義は委員会において、最終的解釈する。

第二十八条　本会規定の改正及び追加は総会においておこなう。

第二十九条　本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

想い出

B・B生

風の強い日だった
船は大きく右、左にゆれていた
甲板で僕達二人は
肩を抱きあっていたっけ……
人は下へ降り
僕達だけの世界だった
君の黒髪が僕の頬に
君の暖かさが肌を伝って
僕の心に
君の嬉しそうな顔
あの笑顔が忘れられない
幸せだった

畜友会だより

昭和四十年度事業計画

昭和三九年

十二月　「ふじみの」編集委員選出、編集開始、懇談会（先生を囲んで）、会報発行

一月　卒業生送別会、記念品贈呈会報発行

四月　「ふじみの」発行
新入生オリエンテーション

五月　在校生名簿作成、新入生歓迎会、会報発行

六月　見学旅行、講演会、会報発行

九月　映画会、会報発行

十月　講演会、収穫祭、会報発行

十一月　定期総会

三十九年十一月十八日の畜友会総会により新役員は次の通り決定致します。

委員長　橋本敬次（三年）
副委員長　谷口広幸（三年）
会　計　前田肇（二年）
会計補佐　奥村定弘（三年）
書　記　苗代信一（四年）
企　画　村山武彦（三年）
渉　外　足立正孝（二年）
クラス委員　鈴木裕（二年）
　　西野正子（三年）
　　藤井丈哉（三年）
　　河合永忠（四年）
　　浜田長幸（四年）
　　関剛（二年）
　　岡本建二（三年）
監査委員　諸木逸郎（三年）
　　今井清孝（二年）
　　田村清蔵（二年）
　　杉本健之（四年）
　　加藤政彦（三年）

畜友会は、名誉会員、特別会員、正会員の協力で、発足以来今年で六年を迎える次第であるが、発足当時の積立金も年々減少し、会費の値上げの問題が前執行部より提案され、昨年十一月の第五回定期総会に、提案した所今まで年間五百円の会費を七百五拾円に値上げする事が決り、昭和四十年度新入生から徴収する事が決定した。

五号編集に際し、会員方々の御協力を深く感謝致します。
次期六号もよりよく充実した機関誌にしたいと思います。
つきまして、特別会員の方々にも広く利用して頂きたいと思います。
皆様の御意見、御希望、その他各種記事を係までお寄せ下さい。
特別会員の住所変更は即座に係りまで御通知下さい。

ノザキの《畜産製品》

ソーセージ

ノザキコンビーフの姉妹品

Nozaki's

野崎食品工業株式会社

本　社　東京都品川区東品川３—24
営業所　酒　田・秋　田・新　潟

肉畜、輸入肉、枝肉

大同畜産株式会社

本　社　東京都品川区東品川３の24
営業所　芝　浦・大　阪・米　沢

編集後記

○後期試験終了後の空気は何となくざわめいている。
畜産名物の留年制度である。
我等編集員諸氏も心配で険悪な空気である。
何故、留年制があるか？
畜産学科だから
フザケルナ（ユルシテ）

○今日は横浜の日本農産へ広告を取りに来た。
折しも時計は重なる昼食どき
先輩に社内食堂でごちそうになる。
とんだ余得である。持つべきものは？だね

○編集員中の紅一点B女史の下宿で編集会議
いつもと違いその日は編集員全員集まる。
どうしてって　ヤボな質問
その時彼女の入れてくれたコーヒーの
うまかった事　うまかった事

○君の話は食べ物の話である。
汝は生きんが為に食らうのか。
食わんが為に生きるのか
ヘヘヘエ　教養がほとばしっちゃったか？

○当世書生気質とは仲々大変なものである
一にアルバイト　二はDATE
三にマーヂャン　四に旅行
そしてちょっぴり勉強も

○「私は学問に生きます」
うそつけ彼女がいないからだろ？
君は食気only だろ？

○ついに完成である。
この充血した目がその苦闘を語る
しかし君等にはそれは見えない。
このつまらぬ編集後記を読んだ貴方の
努力と忍耐は認めるがここまで読んだら
ハイ　サヨウナラ

編集の睡魔に向いていうことなし
この作成の有難きかな
豚木

昭和40年4月13日　印刷
昭和40年4月25日　発行
〃ふじみの〃　第5号
編集責任者　谷口広幸次
発行者　橋本敬
発行所　東京都世田谷区世田谷四
東京農業大学畜友会
電話（420）2131（呼）
印刷所　エルデ・タイプ社
電話（429）1067

マルエイ完全飼料
日本農産工業株式会社
畜産経営の合理化に
養鶏用
乳牛用
養豚用
畜産物市況
日本短波放送
毎日 17.40分 ～ 50分まで
―東京、大阪の鶏卵・食鶏
飼食食肉市況を速報―
営業所／小樽／横浜／名古屋／坂出／門司


栄養豊かな
キユーピー
マヨネーズ
®

畜産・養鶏の近代化を進めよう!!

★ 初生雛・種卵輸出入
★ 畜産・養鶏近代化設備・装置
★ 鶏舎・畜舎の設計・施工
★ 畜産・養鶏経営コンサルタント
★ 構造改善事業の立案・設計
★ 養鶏・畜産団地の造成立案・設計
★ 食鳥処理プラントの設計・施工
★ 鶏卵処理プラントの設計・施工

TOHZAI

東西産業貿易株式会社

本　社　東京都千代田区神田司町1－8　TEL（254）4211
営業所　名古屋・大　阪・広　島・福　岡・札　幌

近代設備を誇る

マザー牧場

営業課目

◎酪農課……アメリカより種乳牛15頭を輸入繁殖中
100頭収容全機械化フリーバーン
◎養豚課……ラントレース・ラージホワイト・ハンプシャー
種(120頭輸入),三元交配・原種,仔豚分譲受付中
◎乳製品課……マザー牛乳製造販売
◎観光課……レストハウス・ロッヂ・貸山荘
展望館（円型三階建）

畜産オリンピック「近代農業と国際畜産ショー」
昭和40年 4 月10日 ⇨ 5 月10日　開催

株式会社　房総農場

牧　場　千葉県君津郡天羽町(房総西線佐貫町駅下車)　TEL（秋元）3637
東京営業所　東京都港区芝公園20号地　放送センター内　TEL（433）5581